

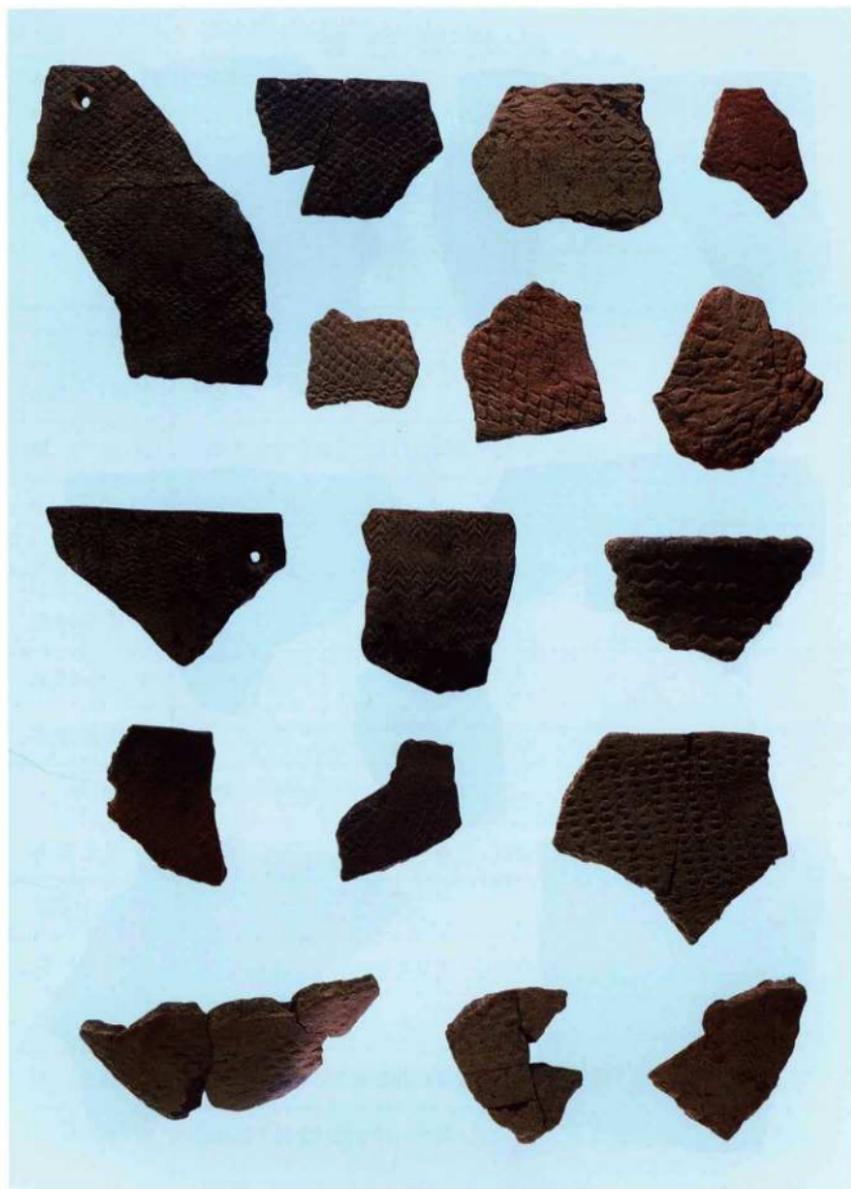
田野町文化財調査報告書 第28集

鹿^か毛^げ第3遺跡

県営畑地帯総合整備事業七野・八重地区に
伴う野崎地区鹿毛第3遺跡発掘調査報告書

1998

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会



鹿毛第3遺跡出土押型文土器



鹿毛第 3 遺跡出土条痕文土器

報告書抄録

ふりがな	か げ だ い 3 い せ き					
書 名	鹿 毛 第 3 遺 跡					
副 書 名	県営畑地帯総合整備事業七野・八重地区に伴う野崎地区鹿毛第3遺跡発掘調査報告書					
巻 次						
シリーズ名	田野町文化財調査報告書					
シリーズ番号	第28集					
編 著 者 名	田野町教育委員会 文化財調査事務所 森田浩史・金丸武司					
編 集 機 関	田野町教育委員会					
所 在 地	宮崎県宮崎郡田野町甲2818番地					
発行年月日	1998年(平成10年)3月					
ふりがな	か げ だ い 3 い せ き					
所収遺跡名	鹿 毛 第 3 遺 跡					
ふりがな	みやざきけんみやざきぐんたのらけいおのかけ					
遺跡所在地	宮崎県宮崎郡田野町 乙 鹿毛 13827番地 外					
市町村コード		遺跡番号		北緯		東経
調査期間	平成8年10月17日～平成9年1月20日					
調査面積	3,628㎡					
調査原因	平成8年度県営畑地帯総合整備事業七野・八重地区					
主な時代	旧石器 縄文時代早期・中世			主な遺構 集石遺構・土坑		
主な遺物	旧石器・縄文時代早期条痕土器、押型文土器、塞ノ神式土器、石器など					

例 言

1. 本書は平成8年度県営畑地帯総合整備事業七野・八重地区に伴い、宮崎県中部農林振興局の依頼を受けて実施した「鹿毛第3遺跡」の調査結果を報告するものである。
2. 平成8年度の現地調査及び資料整理、9年度の資料整理及び調査報告書の作成は宮崎県中部農林振興局の委託事業ならびに文化庁の国庫補助事業により実施した。
3. 調査は、次の体制で実施した。

調査主体	田野町教育委員会	教育長 鍋倉 政信	
		社会教育課長 前田 久育 (平成8年度)	
		出原 信行 (平成9年度)	
		社会教育課長補佐兼係長	
		川口 博文	
埋蔵文化財担当	同 主任	森田 浩史	
	同 主事補	金丸 武司	
調査事務担当	同 主任	森田 浩史	
発掘調査担当	同	森田 浩史	
	宮崎県教育庁 文化課	主査 永友 良典 (現場派遣)	
	宮崎県埋蔵文化財センター係	長 北郷 泰道 (現場派遣)	
調査指導	宮崎県教育庁 文化課	宮崎県埋蔵文化財センター	
4. 資料整理・調査報告書作成に伴う諸作業は、
の補助を得ておこなった。
5. テフラ検出及び放射性炭素年代測定等の自然科学分析調査については、株式会社古環境研究所に委託した。
6. 本書には第Ⅲ章に古環境研究所の報告書を転載した。第Ⅱ章第4・5節を金丸が、第Ⅲ章を除く他を森田が執筆し、森田が編集した。
7. 本書に用いた方位は磁北、標高は海拔絶対高である。
8. 本書の色調表示は、農林省農林水産技術会事務局監修の『標準土色帳』を参考にした。
9. 本書における遺構の表示には、下記の記号を用いた。

集石遺構 (SI)	土坑 (SC)
-----------	---------
10. 出土遺物は田野町教育委員会文化財調査事務所及び文化財収蔵庫に保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第1節 遺跡の位置と歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査の結果	1
第1節 調査の概要	5
第2節 検出遺構	5
第3節 出土遺物(土器)	9
第4節 出土遺物(石器)	26
第5節 旧石器時代の遺物	34
第Ⅲ章 自然科学分析調査の結果	35
第1節 はじめに	35
第2節 テフラ検出分析	35
第3節 屈折率測定	35
第4節 まとめ	36
第Ⅳ章 まとめ	37
第1節 出土遺物の概観	37
第2節 縄文時代の諸様相	38
第3節 弥生時代の諸様相	41
第4節 古代の諸様相	42
第5節 中世の諸様相	42
第6節 おわりに	43

図版目次

第1図 町内主要遺跡分布図	2
第2図 調査区位置図	3
第3図 調査区概要図	4
第4図 基本土層柱状図	5
第5図 遺構実測図(SC-01・02)	7
第6図 遺構実測図(SC-03~11・14)	8
第7図 A区出土遺物分布図	15
第8図 出土遺物実測図(A区の土器)	16
第9図 B区出土遺物分布図	17~18
第10図 出土遺物実測図(B区の土器)	19
第11図 出土遺物実測図(B区の土器)	20
第12図 出土遺物実測図(B区の上器)	21
第13図 出土遺物実測図(B区の土器)	22
第14図 出土遺物実測図(B区の土器)	23
第15図 出土遺物実測図(B区の土器)	24

第16図	出土遺物実測図 (B区の土器)	25
第17図	出土遺物実測図 (石 鏃)	28
第18図	出土遺物実測図 (石斧ほか)	29
第19図	出土遺物実測図 (石 斧)	30
第20図	出土遺物実測図 (磨 石)	31
第21図	出土遺物実測図 (磨 石)	32
第22図	出土遺物実測図 (用途不明石器)	33
第23図	出土遺物実測図 (旧石器)	34

表 目 次

表1～3	出土遺物観察表	12～14
------	---------	-------

写 真 図 版 目 次

図版 1	調査着手前全景 (北から)	図版11	B区の出土遺物 1 (土器)
図版 2	A区調査状況 (西から)	図版12	B区の出土遺物 2 (土器)
	A区調査状況 (南東から)	図版13	B区の出土遺物 3 (土器)
図版 3	A区調査状況 (東から)	図版14	B区の出土遺物 4 (土器)
	SC-01・02検出状況 (北西から)	図版15	B区の出土遺物 5 (土器)
	SC-01火山灰検出状況	図版16	B区の出土遺物 6 (土器)
図版 4	SI-03検出状況 (北東から)	図版17	B区の出土遺物 7 (土器)
	SI-03土坑検出状況 (同上)	図版18	B区の出土遺物 8 (土器)
	SI-04検出状況 (北東から)		B区の出土遺物 9 (土器)
図版 5	SI-05検出状況 (北東から)	図版19	B区の出土遺物10 (土器)
	SI-06検出状況 (南から)	図版20	B区の出土遺物11 (土器)
	SI-07検出状況 (南から)	図版21	B区の出土遺物12 (土器)
図版 6	B区調査状況 (南西から)	図版22	B区の出土遺物13 (土器)
	B区調査状況 (東から)	図版23	B区の出土遺物14 (石器)
図版 7	B区調査状況 (南から)	図版24	B区の出土遺物15 (石器)
	SI-08検出状況 (南から)	図版25	B区の出土遺物16 (石器)
	SI-09検出状況 (西から)	図版26	B区の出土遺物17 (石器)
図版 8	SI-10検出状況 (東から)		
	SI-11検出状況 (西から)		
	SI-14検出状況 (北東から)		
図版 9	A区の出土遺物 1 (土器)		
図版10	A区の出土遺物 2 (土器)		

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

田野町は宮崎市から西方約20kmの地点を中心とする田野盆地と、それを取り囲む鰐塚山をはじめとする山々からなり、1市（宮崎市）5町（清武町・高岡町・山之口町・三股町・北郷町）と接している。主な産業は大根や葉煙草などを主体とする農業であったが、近年は高速道路や国県道の整備によって交通の要衝の地となり、さらに工業団地の整備と企業や専門学校の誘致、宅地開発なども進み、徐々にではあるが変化・発展する町となった。しかし、その一方で農業基盤整備事業や各種開発事業に伴う埋蔵文化財の保存が大きな問題となり、町教育委員会でも調整や調査体制の整備充実を図ってきたが、これらにかかる遺跡の大部分は記録保存の対象となり消滅している。

平成8年度は県営畑地帯総合整備事業七野・八重地区が実施されることとなり、事業地内に鹿毛第3遺跡が所在したので、県文化課が分布範囲等を確認するために試掘調査したところ、一部消滅してはいるものの、かなり広範囲に縄文時代早期の遺物が分布することが明らかになった。平成8年4月以降は町教育委員会、県文化課と原因者である宮崎県中部農林振興局との間で遺跡の保存について再三にわたり協議したが、設計施工上現状保存が不可能な部分についてのみ発掘調査を実施することとなり、平成8年10月7日付けで同振興局と委託契約を締結し、同年10月17日から現地の調査に着手した。また、地元負担の部分については国庫補助事業で対応した。調査面積約15,000㎡を対象として、県文化課ならびに同埋蔵文化財センターの指導・派遣を得ながら同9年1月20日に完了した。実質調査面積は約3,628㎡に至った。

第2節 遺跡の位置と歴史的環境

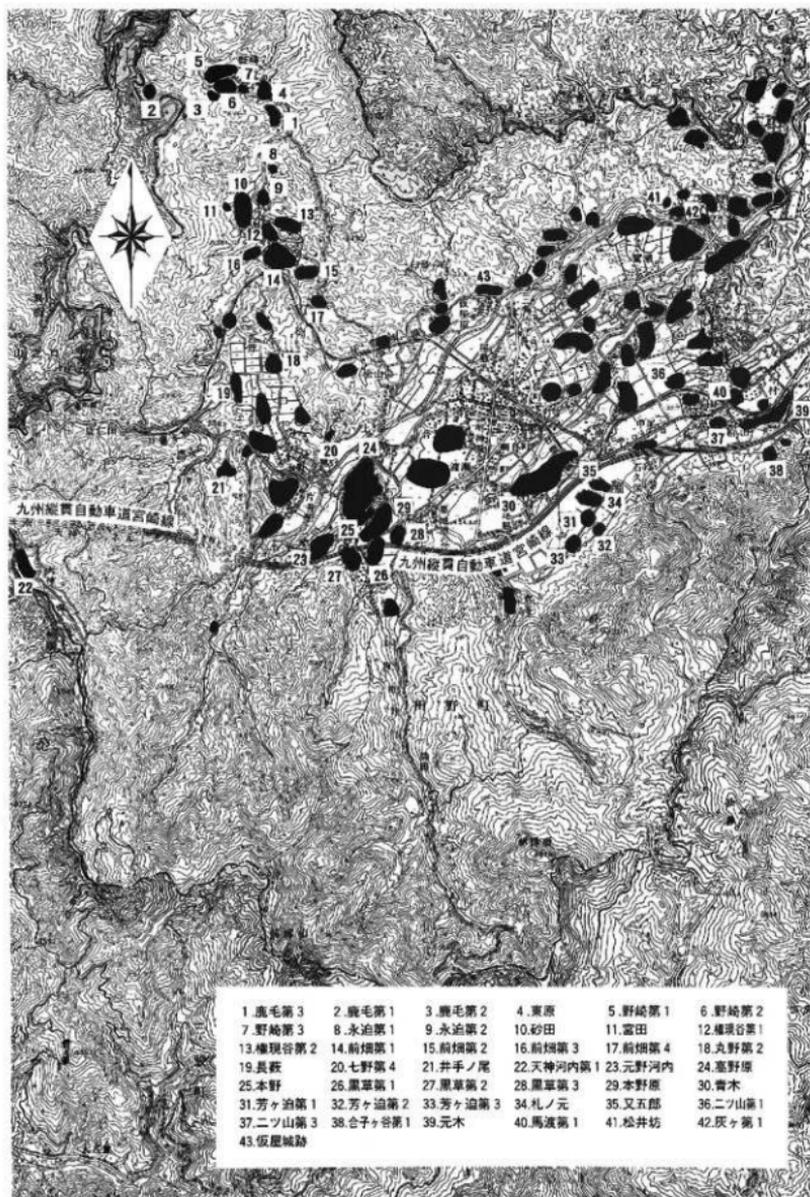
鹿毛第3遺跡は田野町の中心部から北北西の高岡町と接する野崎地区に所在する。同地区にはこの他に鹿毛第1・第2遺跡、野崎第1～第3遺跡、東原遺跡などがあり、いずれも未調査で平成元年度に実施した町内遺跡詳細分布調査により発見された。鹿毛第1遺跡で古代、野崎第1・第2遺跡で弥生時代、東原遺跡で縄文時代の上器片が表面採取されている。また、野崎地区のすぐ南方には八重地区の遺跡群があり、総数10遺跡のうち7遺跡（永迫第2・砂田・権現谷第1・権現谷第2・前畑第1・前畑第2・砂田）については昭和63年度から実施されている県営農地保全整備事業八重地区に伴い、記録保存のための発掘調査がおこなわれた。旧石器時代は本遺跡の調査により少量ではあるが確認された。縄文時代草創期になると砂田遺跡で爪形土器が出土している。また早期は上記の全遺跡で出土している。権現谷第1遺跡では前期、砂田遺跡では後期の遺構・遺物が出土しているほか、永迫第2遺跡で中期～晩期の土器片がごく少量出土したのみである。これ以降の時代になると、権現谷第1遺跡で弥生時代後期の堅穴住居跡が2棟、前畑第2遺跡で中世のU字状溝と箱矢研掘りの溝が確認されたのみである。

〔参考文献〕

「田野町内遺跡詳細分布調査」田野町文化財調査報告書第10集 田野町教育委員会 1990

「八重地区遺跡」田野町文化財調査報告書第19集 田野町教育委員会 1994

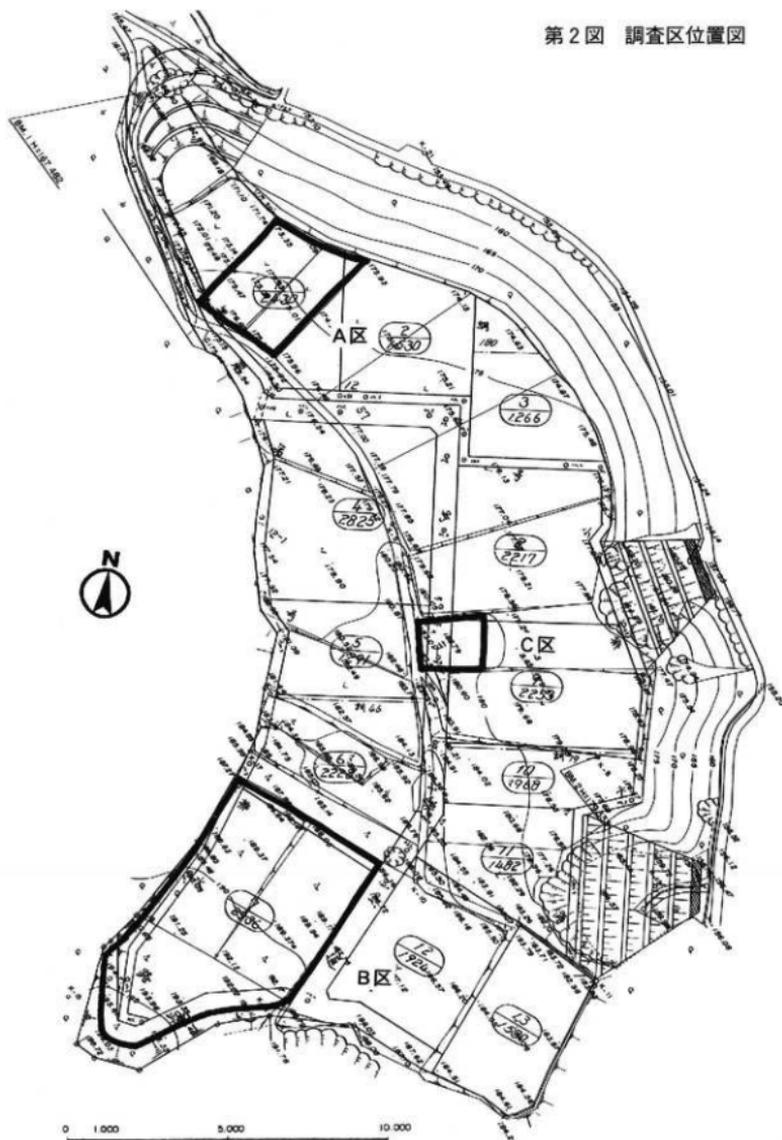
「鹿毛第3遺跡調査概要」田野町文化財調査報告書第26集 田野町教育委員会 1997

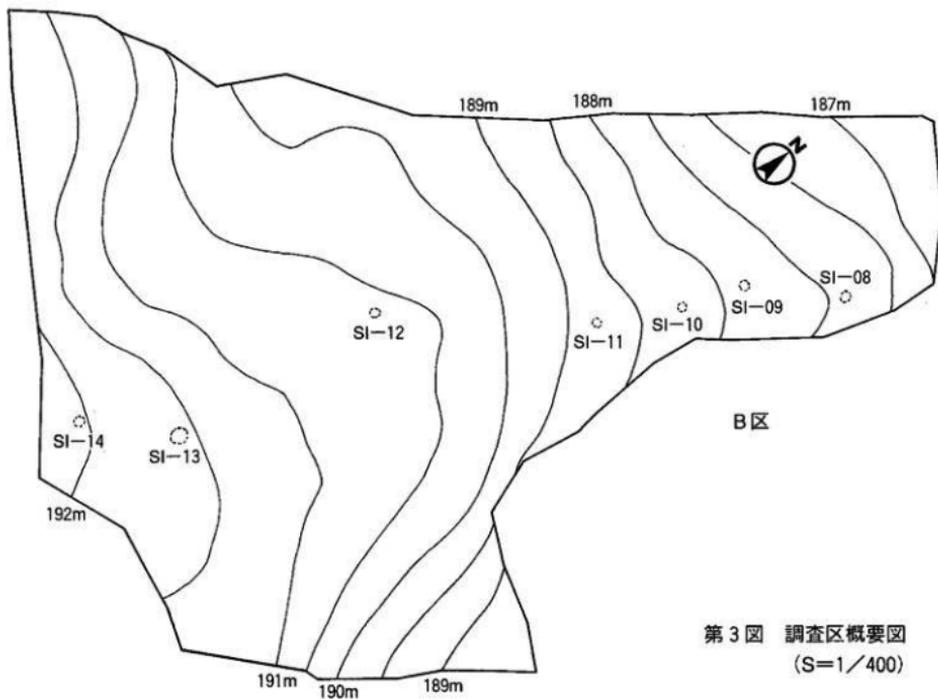
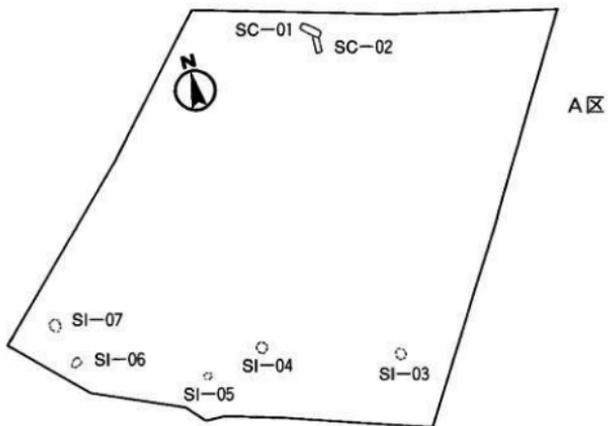


- | | | | | | |
|----------|-----------|----------|-----------|---------|----------|
| 1 鹿毛第3 | 2 鹿毛第1 | 3 鹿毛第2 | 4 東原 | 5 野崎第1 | 6 野崎第2 |
| 7 野崎第3 | 8 永泊第1 | 9 永泊第2 | 10 砂田 | 11 雲田 | 12 糠原谷第1 |
| 13 糠原谷第2 | 14 前畑第1 | 15 前畑第2 | 16 前畑第3 | 17 前畑第4 | 18 丸野第2 |
| 19 長敷 | 20 七野第4 | 21 井手ノ尾 | 22 天神河内第1 | 23 元野河内 | 24 基野原 |
| 25 本野 | 26 黒草第1 | 27 黒草第2 | 28 黒草第3 | 29 本野原 | 30 青木 |
| 31 芳ヶ泊第1 | 32 芳ヶ泊第2 | 33 芳ヶ泊第3 | 34 札ノ元 | 35 又五郎 | 36 ニツ山第1 |
| 37 ニツ山第3 | 38 合子ヶ谷第1 | 39 元木 | 40 馬渡第1 | 41 松井坊 | 42 灰ヶ第1 |
| 43 仮屋城跡 | | | | | |

第1図 町内主要遺跡分布図

第2図 調査区位置図





第3図 調査区概要図
(S=1/400)

第二章 調査の結果

第1節 調査の概要

調査は設計上で切土となり遺跡が消滅する部分のみを対象とし、遺跡の北側をA区、南側をB区、中央をC区として実施した。また、調査の中で遺物包含層や遺構面が残存しない部分については対象から除外した。実質調査面積はA区が1,076㎡、B区が2,460㎡、C区が92㎡に至った。各調査区の基本層位は上層から耕作土又は腐食土、赤ホヤ火山灰堆積、暗褐色土、褐色土1、褐色土2に分けられるが、B区の一部など木根の影響を受けたため共通した堆積が見られない部分もあった。遺構検出や精査は、主にこの褐色土1・2層中においておこなった。A・B区で集石遺構が検出され、各調査区において縄文時代早期の上器と石器が出土したほか、A区において長方形の土坑も検出された。

第2節 検出遺構

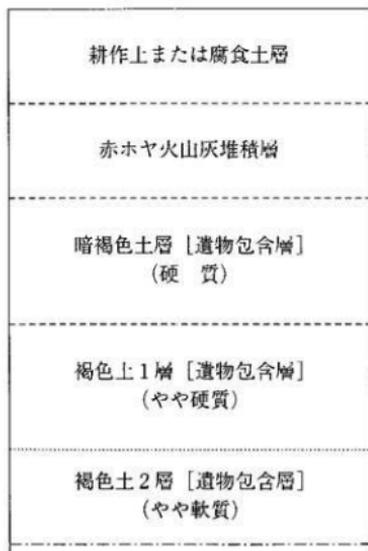
A区で集石遺構が5基(SI-03~07)と土坑が2基(SC-01・02)、B区で集石遺構が7基(SI-08~14)検出された。集石遺構は大半が遺物を伴わないが、赤ホヤよりも下層の褐色土1層の下部と2層中において検出されたため、縄文時代早期のものと考えられる。またSC-01については遺物の出土がなかったため、同覆土中の火山灰を分析することによってその埋没年代を推定した。

(SC-01)

A区北側の赤ホヤが残存しない部分の褐色土層1の上面で検出した。W42°Nを主軸とし深さ約66.5cmで160.95cm×66.5cmの長方形を呈する。覆土は4層に分けられたが、下位より2層目については厚さ約12.5cmの霧島高原スコリアが明らかに人為的に敷きつめられた状態で見られた。また、同3層目からは桜島3テフラが検出されたことから1471年以降の埋没を想定しうるが、具体的な用途等については明確にできなかった。

(SC-02)

SC-01を僅かに切り込む。褐色土層1の上面で検出した。N3°Eを主軸とし深さ約32.0cmで134.0cm×45.0cmの長方形を呈する。覆土は1層のみでSC-01のようなテフラは検出されなかった。また、遺物も出土しなかったので埋没の年代を推定することはできない。SC-01よりやや小規模でありながら同一のプランを呈するが、他に共通する要素を見出すことはできなかった。



第4図 基本土層柱状図

前記土坑 (SC-01・02) の用途及び分布域については、本調査で明確にすることはできなかったが、本遺跡において表面採集資料を含め縄文時代早期以降の遺物は発見されておらず、中世以降の所産である同遺構に伴う集落等の所在は否定せざるを得ない。従ってSC-01におけるテフラの埋設状況から推察して、集落から隔離された埋葬施設である可能性を検証していく必要がある。分布域については推測の域を出ないが、検出地点より北側及び南西側はいずれも傾斜地であり、同遺構が存在する可能性は低い。また南西側においても、その痕跡すら見出すことはできなかった。

(SI-03)

A区南側の褐色土層2中において検出した。153cm×133cmの範囲に3cm～18cm大の礫がやや密に分布し、125cm×125cmで深さ11cmの土坑を伴う。礫は他の集石遺構と同じく熱を受けたためか赤変し、ヒビ割れもしくは破碎したものも見られた。

(SI-04)

A区南西側緩斜面の褐色土層2上面において検出した。140cm×93cmの範囲に4cm～18cm大の礫がやや密に分布し、98cm×92cmで深さ約7cmの浅い土坑を伴う。

(SI-05)

A区南西側の褐色土層2上面において検出した。67cm×58cmの範囲に5cm～19cm大の礫が疎らに分布する。土坑を伴わない散石状遺構である。

(SI-06)

A区西側の褐色土層2上面において検出した。4cm～13cm大の礫が疎らに分布する散石状遺構である。

(SI-07)

A区南側緩斜面の褐色土層2上面において検出した。83cm×87.5cmの範囲に4cm～35cm大の礫が分布し、66cm×62cmで深さ11cmの土坑を伴う。他の集石遺構と比較して大ぶりの礫が多く、本来は配石がなされていたものと考えられる。

これら集石遺構 (SI-03～07) の所在するA区は北側斜面下の境川支流と至近距離にあり、縄文時代の生活域としては絶好の条件下にある。本調査においては住居跡を検出していないが、調査区南側に塞ノ神式土器の良好な出土状況 (3～6ほか未掲載の回破片) がみられ、ごく近隣に住居が営まれた可能性も推察される。廃棄された時期については、検出層位及び塞ノ神式土器が出土遺物の主体を占める状況から、縄文時代早期後葉に設定したい。

(SI-08)

B区北東側緩斜面の褐色土層2中において検出した。118cm×95cmの範囲に3cm～15cm大の礫がやや密に分布する。土坑を伴わない散石状遺構である。

(SI-09)

B区北東側緩斜面の褐色土層2中において検出した。102cm×80cmの範囲に3cm～14cm大の礫がやや疎らに分布する。土坑を伴わない散石状遺構である。

(SI-10)

SI-09の南西約5.5mの緩斜面の褐色土層2中において検出した。97cm×15cmの範囲に4cm～17cm大の礫がやや密に分布し、100cm×85cmで深さ12cmの土坑を伴う。

(SI-11)

SI-09の南西約12.5mの緩斜面の褐色土層2中において検出した。72cm×61cmの範囲に4cm～21cm大の礫が疎らに分布し、79.5cm×81cmで深さ13cmの土坑を伴う。

(SI-12)

B区中央寄り緩斜面の褐色土層2中において検出した。98cm×95cmの範囲に3cm～11cm大の礫が分布し、64cm×64cmで深さ9cmの土坑を伴う。

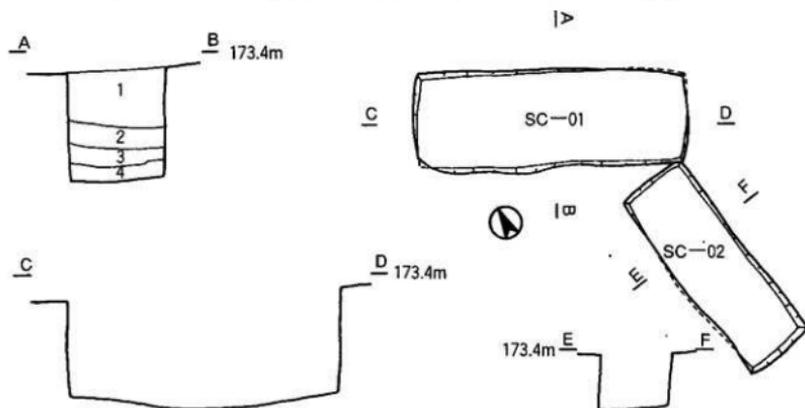
(SI-13)

B区南側緩斜面の褐色土層2中において検出した。74cm×65.5cmで深さ15cmの土坑を伴い4cm～9cm大の礫がごく少量分布する。土坑内および周辺からは同一個体の塞ノ神式土器(94ほか未掲載の同破片)がまとまって出土している。

(SI-14)

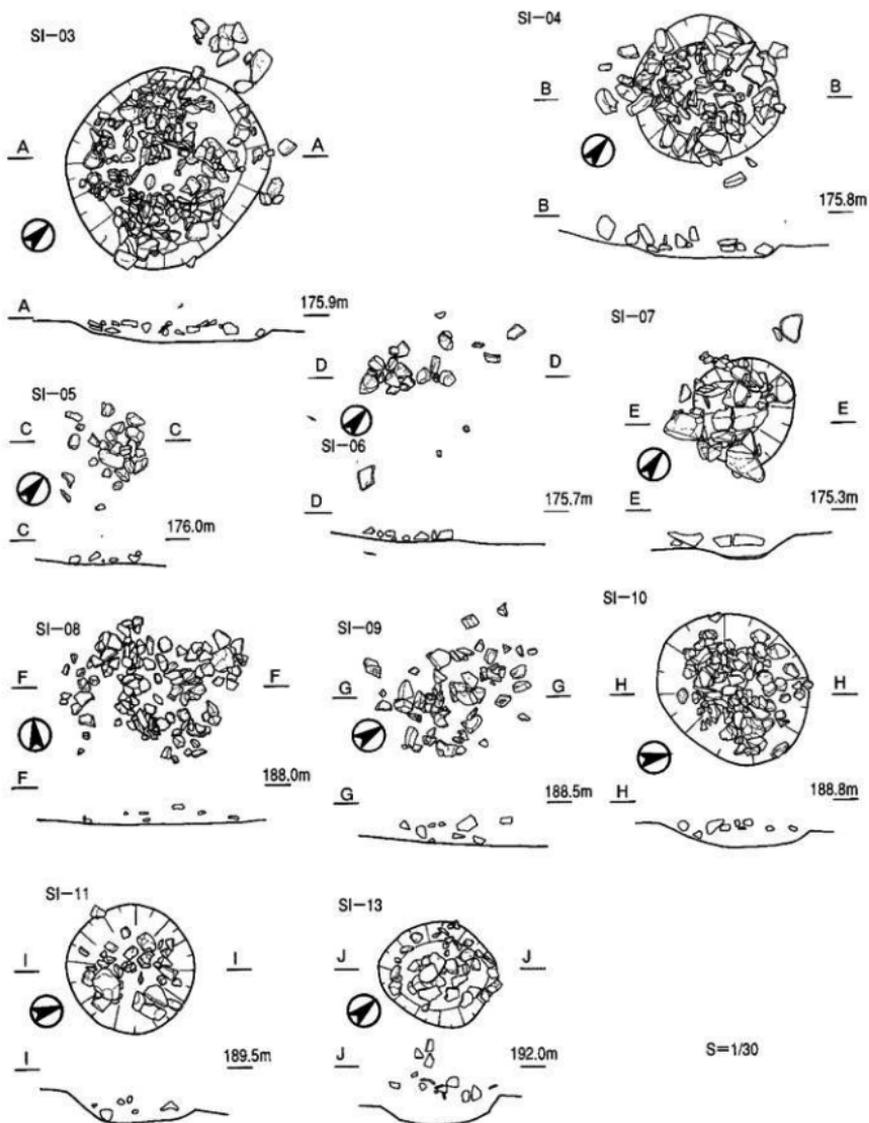
B区南側緩斜面の褐色土層2中において検出した。160cm×120cmの範囲に4cm～18cm大の礫がややまばらに分布する。土坑を伴わない散石状遺構である。

これら集石遺構(SI-08～14)は傾斜地の緩やかな谷筋上に比較的整然と設置されており、分布上の特徴として注意しておく必要がある。具体的見解として、調査区内において早期中葉から後葉にかけての遺物が大差無く出土した状況に対し、前記分布状況は遺構の大きな時期差を否定する要素となり得ることが挙げられよう。これらの事象に加え、SI-13において塞ノ神式土器が良好な出土状況をみせていることから、B区検出の集石遺構は縄文時代早期後葉に廃棄されたものと想定しておきたい。また、B区出土の塞ノ神式土器はA区出土のものと同タイプであり、これらは同一集落を営む過程で設営されたものであると推察される。



※ 1…10YR黄褐5/8 2…2.5YR赤褐(火山灰粒含む)
 3…7.5YR極暗赤褐2/2(火山灰粒) 4…5YR明赤褐5/8

第5図 SI-01・02実測図(S=1/30)



第6図 遺構実測図 (SI-03~11・13)

第3節 出土遺物（土器）

遺構内からの出土遺物はSI-13の(68・94)のみで、他は主に遺物包含層である第3～4層の掘り下げ段階で出土した。A区においては南側緩斜面の上方に、B区においては緩斜面の中央から南側上方寄りに遺物の濃厚な分布が見られた。(1～6)はA区、(66)はC区、他はB区の出土である。これらは掘り下げ及び取り上げの段階で可能な限り層位ごとの取扱いを試みたが、堆積の乱れや木根による攪乱のために明確な区分は不可能であった。すべて縄文時代早期の遺物である。

・I類 角筒土器で貝殻腹縁刺突線文と角部にヘラ刻みを施す。(1・2)

いずれも楔形凸帯文の有無は確認できない。

・II類 条痕文土器(7～16)

II a類 口唇部に貝殻腹縁押引文、胴部に斜方向の貝殻条痕文を施す。(7)

内面は一部条痕がみられるが、風化ため詳細は不明。

II b類 胴部に斜方向の条痕文を施す。(8・9)

内面はいずれも風化が著しく調整等の詳細は不明。

II c類 横位の条痕文を施す。(10・11)

(10)は口縁部で(11)は同一個体の胴部下半とみられる。(11)の下部2/3は風化により文様帯を消失する。内面はいずれもケズリにより仕上げる。

II d類 縦位の条痕文ののち横位の条痕文を施す。(12・13)

(12)の内面は風化のため調整等の詳細は不明。(13)は内面をケズリにより仕上げる。

II e類 縦位の浅い条痕文を施す。(14)

上部でやや外反しており、口縁部付近とみられる。内面は横位の条痕により仕上げる。

II f類 不定方向の浅い条痕を施す。(15)

薄手で内面は縦方向の条痕により仕上げるが、口縁部直下のみ横方向の条痕がみられる。

II g類 横位の貝殻腹縁刺突線文を波状に施し、内面はケズリにより仕上げる。(16)

・III類 (17～38)

III a類 縦位の貝殻腹縁押引文を密に施したのち、棒状施文具による短沈線をハの字状に施す。(23・24)

窓状の文様帯をハの字状短沈線によりつくる。両者は同一個体とみられる。内面はケズリにより仕上げる。

III b類 縦位の貝殻腹縁押引文を施す。(25～28)

(26～28)はIII a類の同タイプあるいは同一個体とみられる。いずれも内面はケズリにより仕上げる。

III c類 横位の貝殻腹縁押引文を施す。(29～31)

内面は風化により明確でないが、ケズリにより仕上げるものとみられる。

III d類 貝殻腹縁刺突線文を施したのち、棒状施文具による短沈線をハの字状に施す。

(18～20)

(19・20)は口縁部付近から端部にかけて内湾する。いずれも内面はケズリにより仕上げる。

III e類 貝殻腹縁刺突線文を施したのち、棒状またはヘラ状施文具による短沈線をハの字状に施す。(21)

Ⅲ a・b類と同タイプとなる可能性がある。内面はケズリにより仕上げる。

Ⅲ f類 ヘラ状施工具による短沈線をハの字状に施す。(22)

口縁部が内湾するもので、現状ではⅢ類のどのタイプに属するものか判断できない。内面はケズリにより仕上げる。

Ⅲ g類 貝殻腹縁刺突文を綾杉状に施す。(32)

内面は風化が著しく調整等の詳細は不明。

Ⅲ h類 貝殻腹縁刺突文を縦横に施し、複雑な文様帯をつくる。(17)

口唇部は平坦面をつくるがやや粗雑である。内面はケズリにより仕上げる。

Ⅲ i類 貝殻腹縁による横位の刺突文をやや疎らに施す。(33・34)

(34)は口縁部が内湾し、口唇部は明瞭な平坦面をつくる。内面はケズリにより仕上げる。
(33)は同一個体の底部とみられる。

Ⅲ j類 櫛羽状施工具により押しき状の文様を密に施す。(35~38)

・Ⅳ類 縄文土器 (39~41)

3点とも同一個体とみられる。斜方向の捺糸文を施す。(39)は頸部で緩やかに外反するもので、口縁部直下に補修孔がみられる。

・Ⅴ類 押型文土器 (54~87)

V a類 横走りの楕円押型文を内外面に施す。(54~56)

(54・55)は口唇部に面をつくる。

V b類 横走りの楕円押型文を施す。(57~60・64・65)

(54~58)は原体がきわめて小粒、(59・60)はこれに対してやや大粒である。(64)は尖底の付近とみられる。

V c類 横走りの楕円押型文を施したのち、ナデ消しにより無文帯をつくる。(61・62) (61)は口唇部に面をつくり、同原体による押型文を施す。

V d類 大粒の楕円押型文を施す。(68~70)

V e類 横走りの楕円押型文、内面に原体条痕を施す。(63)

内面に押型文を施文しない。

V f類 縦走りの楕円押型文を施す。(66)

V g類 縦走りの楕円押型文を施したのち、さらに横走りの楕円押型文が重ねられる。(67)

V h類 小粒の原体による横走りの山形押型文を施したのち、ナデ消しにより無文帯をつくる。(71)

内面は無文でケズリにより仕上げる。口唇部に面をつくる。

V i類 小粒の原体による横走りの山形押型文を施す。(72~74)

(72)の内面は無文で、口唇部に面をつくる。

V j類 内外面に横走りの山形押型文を施したのち、内面に原体条痕を施す。(75)

口唇部に面をつくり、内面はケズリのちナデにより仕上げる。

V k類 内外面に横走りの山形押型文を施したのち、口唇部内面に原体条痕を施す。(76)

口唇部は丸くおさめ、内面はケズリのちナデにより仕上げる。

V l類 横走りの山形押型文を施す。(77~81)

V j類及びV k類の同一個体または同タイプとみられる。(81)は平底である。

V m類 格子目押型文を施したのち、ナデ消しにより無文帯をつくる。(82~87)

(82)の内面は無文でケズリにより仕上げ、口唇部に面をつくる。(83~87)は同一個体とみられるが(82)とは押型文の原体が異なるので別個体であろう。内面はケズリののちナデにより仕上げる。

・**VI類** 貝殻文系塞ノ神式土器(2~6・88~106)

貝殻による連続刺突文を横位または斜位にめぐらせるもので、貝殻もしくは櫛状施文具による条線をめぐらすもの(2~6・88~90・94・97・99~103)、ヘラ状施文具による条線をめぐらすもの(91~93・95)、ヘラ状施文具による沈線文を斜格子状に施すもの(104~106)がある。

・**VII類** 捻糸文系塞ノ神式土器(107・108)

胴部に縦位の捻糸文を回転押捺するもので(111)は頸部直下にヘラ状施文具による条線をめぐらす。

・**VIII類** その他の塞ノ神式土器(109)

横位の平行沈線を施したのち捻糸文を模倣したような緩やかな波状の並行沈線を施す。

・**IX類** その他の土器(42~53)

IX a類 無文土器(50・51)

(50)は内面を荒いケズリにより仕上げる。

IX b類 縦位の貝殻刺突線文により文様帯をつくる。(45)

文様帯をV字状に交差させた状態がみられる。内面はケズリにより仕上げる。

IX c類 棒状施文具による密な刺突文の下位に縦位の貝殻刺突線文を施す。(48)

内面は横方向の条痕により仕上げる。

IX d類 ヘラ状施文具による短沈線を施す。(42・43)

沈線文はシャープに深く切り込まれる。(42)は僅かに内湾する口縁部で縦位の短沈線を間隔をおいてめぐらせる。内面は風化のため調整等の詳細は不明。(43)は短沈線を文様帯のように施すが、その方向及び単位は不規則である。内面はケズリにより仕上げる。

IX e類 細い沈線文帯を縦位に施す。(44)

IX f類 ヘラ状施文具による沈線を縦走りの山形押型文状に施す。(46)

沈線は下部にかけて徐々に間延びしながら浅く粗雑化して終息する。やや丸みを帯びた形状を呈する。

IX g類 斜位の平行する沈線を施す。(47)

外反する口縁部で内面は押型文土器の手法を模した疑似原体条痕的な押圧文の直下に横位の押しき状の沈線を3条施す。補修孔の一部がみられる。

IX h類 棒状施文具による刺突列文を施す。(49)

中間部で強く外反し、さらに上部でくの字に屈曲する。刺突列文の間にユビ圧痕文を施す。内面は外反部より上部に条痕による調整が、下部にユビ押さえがみられる。

IX i類 土器底部(52・53)

(52)は条痕がナデ消された痕跡を僅かに残す。いずれも底面及び付近に乳白色の付着物がみられる。

胎土凡例：a(長石) b(角閃石) c(石英) d(長石) e(砂粒) f(白色粒) 1(大量) 2(多量) 3(少量) 4(微量)

図番号	土器	部位	文様及び調整	色調		胎土	備考
				内面	外面		
1	A区	胴部	貝殻線刺突文とヘラ状取体による刻み目文	2.5YR 橙66		a-1b-3e-3f3	I類
2	A区	胴部	貝殻線刺突文とヘラ状取体による刻み目文	7.5YRにぶい橙66		a-1b-3e-4f3	I類
3	A区	口縁部	貝殻押し文と貝殻条線文、内面はケズリ後ナデ	10YR灰黄褐色52	10YRにぶい黄橙73	a-2b-3e-2f3	VI類
4	A区	口縁部	貝殻押し文と貝殻条線文、内面はケズリ後ナデ	10YRにぶい黄橙73		a-2b-3e-2f3	VI類
5	A区	胴部	貝殻条線文、内面はケズリ後ナデ	7.5Y浅黄橙86	10YRにぶい黄橙73	a-3b-3e-3f2	VI類
6	A区	胴部	貝殻条線文、内面はケズリ後ナデ	10YRにぶい黄橙73		a-2b-4f3	VI類
7	B区	口縁部	口唇部に貝殻押し文、以下は斜位の条痕文	5YR 橙68		a-2b-3e-3f3	II a類
8	B区	胴部	斜位の条痕文	10YRにぶい黄橙74		a-2b-3e-3f3	II b類
9	B区	胴部	斜位の条痕文、内面は斜位の条痕	10YRにぶい黄橙74		a-2b-3e-2f3	II b類
10	B区	口縁部	横位の条痕文、内面はケズリ	5Y灰オリーブ42	10YR明黄橙76	a-2b-3e-3	II c類
11	B区	胴部	横位の条痕文	10YR浅黄橙84	10YRにぶい黄橙74	a-2b-3e-3f2	II c類
12	B区	胴部	縦位の後横位の条痕文、内面はナデ	2.5YR浅黄73	2.5YR浅黄74	a-2b-2e-3	II d類
13	B区	口縁部	縦位の後横位の条痕文、内面はケズリ	10YR浅黄橙84	2.5YR浅黄73	a-2b-2e-3	II d類
14	B区	口縁部	縦位の浅い条痕文、内面は横位の浅い条痕	2.5Y浅黄73	2.5Yにぶい黄63	a-2b-2e-3	II e類
15	B区	口縁部	不定方向の浅い条痕文、内面は縦位と横位の浅い条痕	10YRにぶい黄橙74		a-3b-4e-3f2	II f類
16	B区	口縁部	横位の条痕文を波状に、内面はケズリ	10YR 橙44	5YR 橙58	a-2b-3e-3	II g類
17	B区	口縁部	貝殻線刺突文による文様帯、内面はケズリ	2.5Y暗灰黄42	10YRにぶい黄橙74	a-3b-2e-2f3	III d類
18	B区	口縁部	貝殻線刺突文と短沈線文、内面はケズリ	10YRにぶい黄橙74		a-3c-2d-3e-3	III d類
19	B区	口縁部	貝殻線刺突文と短沈線文、内面はケズリ	7.5YR 黒21	10YRにぶい黄橙64	a-3c-2d-3	III d類
20	B区	口縁部	貝殻線刺突文と短沈線文、内面はケズリ	10YRにぶい黄橙54	10YRにぶい黄橙64	c-1d-2f3	III e類
21	B区	胴部	貝殻線刺突文と短沈線文、内面はケズリ	10YRにぶい黄橙74	10YRにぶい黄橙76	a-3c-1d-3	III f類
22	B区	口縁部	短沈線文、内面はケズリ	10YRにぶい黄63	10YRにぶい黄橙74	c-1d-2f3	III a類
23	B区	胴部	貝殻押し文と短沈線文、内面はケズリ	10YRにぶい黄橙64	5YRにぶい黄64	a-3c-1d-3f3	III a類
24	B区	胴部	貝殻押し文と短沈線文、内面はケズリ	10YRにぶい黄橙64	5YRにぶい黄64	c-2d-3	III b類
25	B区	胴部	貝殻押し文、内面はケズリ	10YRにぶい黄橙74		c-1d-3	III b類
26	B区	胴部	貝殻押し文、内面はケズリ	10YRにぶい黄橙64	7.5YR 橙66	c-1d-3	III b類
27	B区	胴部	貝殻押し文、内面はケズリ	10YR灰黄褐色52	7.5YR 橙66	b-3c-1d-3	III b類
28	B区	胴部	貝殻押し文と短沈線文、内面は薄減により不明	7.5YRにぶい黄74		c-1d-2d-3f3	III c類
29	B区	～底部	貝殻押し文、内面はケズリ	7.5Yオリーブ黒31	2.5Y淡黄色84	a-1b-4d-4	III c類
30	B区	胴部	貝殻押し文、内面はケズリ	5Yオリーブ黒32	2.5Y浅黄74	a-1b-4d-4	III c類
31	B区	胴部	貝殻押し文、内面はケズリ	7.5YR 暗橙33	10YRにぶい黄橙72	a-1b-4d-4	III g類
32	B区	胴部	蓑杉状の貝殻線刺突文、内面は薄減により不明	10YRにぶい黄橙63		d-3e-3	III h類
33	B区	～底部	横位の貝殻線刺突文、底外面と内面はケズリ	7.5YR 明橙66	10YRにぶい黄橙64	a-3b-3e-3	III i類
34	B区	口縁部	横位の貝殻線刺突文、内面はケズリ	10YR明黄橙76		a-3b-3f-2	III i類
35	B区	胴部	蓑羽状施文具押し文、内面は薄減により不明	10YRにぶい黄橙64	10YRにぶい黄73	a-2b-3e-2	III j類
36	B区	胴部	蓑羽状施文具押し文、内面は薄減により不明	10YRにぶい黄橙74	10YRにぶい黄橙73	a-2b-3e-2	III j類

表1 出土遺物観察表

胎土凡例：a (長石) b (角閃石) c (石英) d (長石) e (砂粒) f (白色粒) 1 (大量) 2 (多量) 3 (少量) 4 (微量)

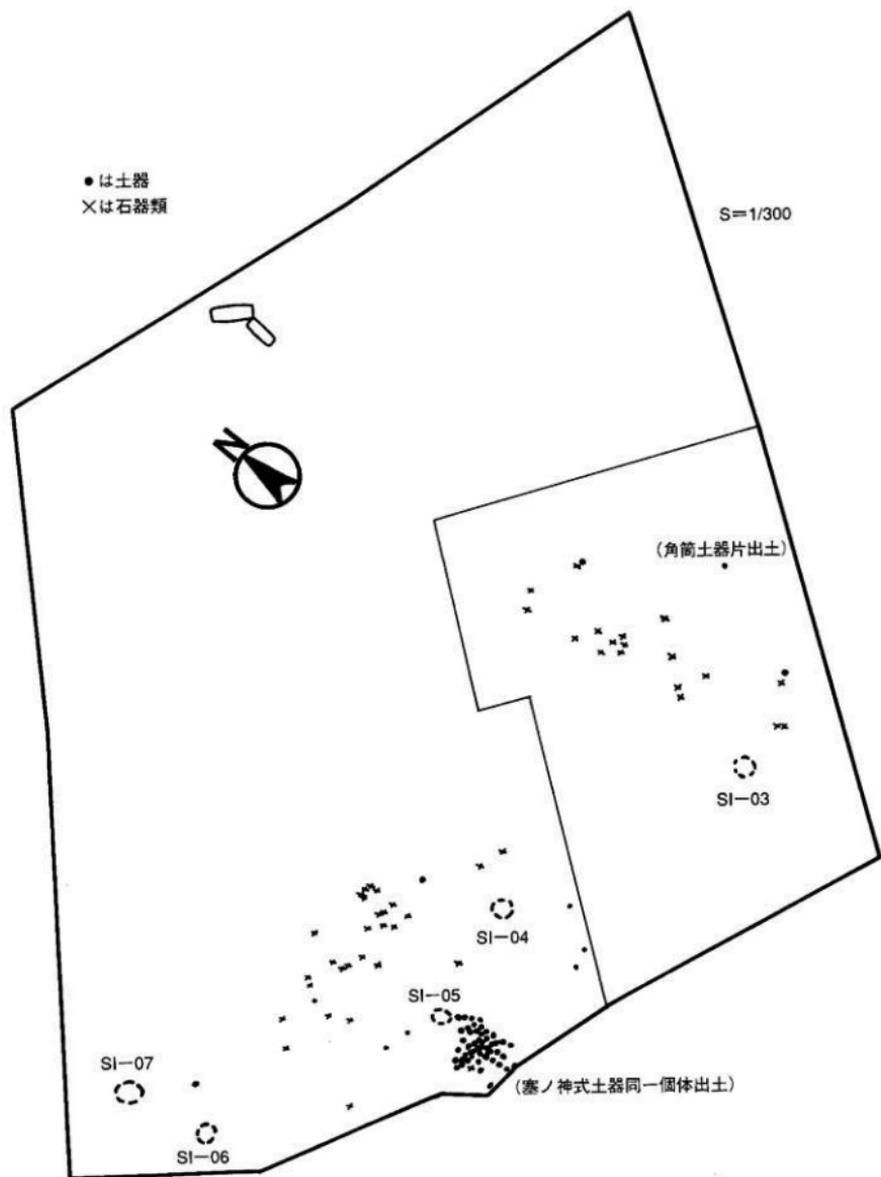
順番	出土部	部位	文様及び調整	色調		胎土	備考
				内面	外面		
37	B区	胴部	縹羽状施文具押引き文、内面は摩滅により不明	7.5YRにぶい黄緑63	10YRにぶい黄緑53	a2b3f3e3	Ⅲj類
38	B区	胴部	縹羽状施文具押引き文、内面は摩滅により不明	10YRにぶい黄緑74		a2b2e3	Ⅲj類
39	B区	口縁部	口唇部と外面は赤系文、内面はナデ	10YR灰黄緑42	10YR灰黄緑52	a3c2d43	Ⅳ類
40	B区	胴部	縹文、内面はナデ	10YR灰黄緑42	10YR灰黄緑52	a3c2d43	Ⅳ類
41	B区	胴部	縹文、内面はナデ	10YR灰黄緑42	10YR灰黄緑52	a3c2d43	Ⅳ類
42	B区	口縁部	ヘラ状原体による短沈線、内面はケズリ	10YR浅黄緑83	2.5Y浅黄74	a3b3d3f2	Ⅳd類
43	B区	胴部	ヘラ状原体による短沈線、内面はケズリ	10YR灰黄緑42	5YRにぶい赤黒44	a3d2e3	Ⅳd類
44	B区	胴部	縹位の縹い沈線、内面はナデ	10YRにぶい黄緑63		d2e3	Ⅳe類
45	B区	口縁部	貝殻緑刺突線文帯、内面はケズリ	10YR黒紺32	2.5Y黄緑53	c3d2e2	Ⅳb類
46	B区	胴部	ヘラ状原体による縹位の山形押型文状沈線文	10YRにぶい黄緑63	10YRにぶい黄緑64	a2e3	Ⅳf類
47	B区	口縁部	やや斜位の平行沈線、内面は縹似原体条痕と押引き状沈線	2.5Y浅黄84	2.5Y浅黄83	a2e3f2	Ⅳg類
48	B区	胴部	棒状原体による刺突文、貝殻緑刺突線文、内面は条痕	10YRにぶい黄緑73		c2d2e2f3	Ⅳc類
49	B区	口縁部付近	棒状原体による刺突文とユビ印文、内面は一部条痕	10YRにぶい黄緑74	10YRにぶい黄緑73	a2e2	Ⅳh類
50	B区	口縁部	無文でナデ調整、内面は靑いケズリ	2.5Y浅黄73	2.5Y灰黄62	a2f2	Ⅳa類
51	B区	口縁部	無文でナデ調整、内面は靑いケズリ	7.5YR橙66	7.5YRにぶい橙64	a3b3e3f2	Ⅳa類
52	B区	～底部	条痕後ナデ消しか? 底面及び付近が乳白色	7.5YR明赤56	10YR褐44	a3d4e3f2	Ⅳi類
53	B区	～底部	条痕後ナデ消しか? 底面及び付近が乳白色	7.5YR橙66	10YR褐44	a2b2e2f3	Ⅳi類
54	B区	口縁部	内外面に小粒原体横走り楕円押型文	10YRにぶい黄緑53	7.5YR橙66	a2b3e2	Va類
55	B区	口縁部	内外面に小粒原体横走り楕円押型文	2.5Y浅黄83	10YRにぶい黄緑74	a2b3e2	Va類
56	B区	口縁部	内外面に小粒原体横走り楕円押型文	5YR明赤58	7.5YR橙66	a3f3	Va類
57	B区	胴部	小粒原体横走り楕円押型文	7.5YR橙66	2.5Y浅黄73	a2b2e3	Vb類
58	B区	胴部	小粒原体横走り楕円押型文	10YRにぶい黄緑74	7.5YR橙66	a2b3e3	Vb類
59	B区	胴部	横走り楕円押型文	2.5Y浅黄84		a3b3e2	Vb類
60	B区	胴部	横走り楕円押型文	10YRにぶい黄緑74	2.5Yにぶい黄63	a2b3e3	Vb類
61	B区	口縁部	横走り楕円押型文とナデ消しによる無文帯、口唇部にも施文	10YRにぶい黄緑74	7.5YRにぶい橙54	a2b2e2f3	Vc類
62	B区	胴部	横走り楕円押型文とナデ消しによる無文帯	2.5Y浅黄84	7.5YRにぶい橙74	a2b2e2f3	Vc類
63	B区	口縁部	横走り楕円押型文、内面に原体条痕	2.5Y浅黄73		c2d2e2	Ve類
64	B区	～先端付近	横走り楕円押型文	10YRにぶい黄緑74		a2b3e2	Vb類
65	B区	～底部付近	横走り楕円押型文	10YRにぶい黄緑74		a2b3e2	Vb類
66	C区	胴部	縦走り楕円押型文、内面は摩滅により不明	7.5YR橙76	10YR明黄緑66	a2b3e2f3	Vf類
67	B区	胴部	小粒原体縦走りと横走り楕円押型文	10YRにぶい黄緑74	10YR褐灰51	a3b3e2f3	Vg類
68	B区	胴部	大粒原体斜走楕円押型文	7.5YR橙66	10YR明黄緑76	a3b2f2	Vd類
69	B区	胴部	大粒原体斜走楕円押型文	10YRにぶい黄緑74	2.5Y黄灰51	b2c3e3	Vd類
70	B区	胴部	大粒原体縦走り楕円押型文	7.5YRにぶい橙54	2.5Y浅黄84	a3b2e3f3	Vd類
71	B区	口縁部	横走り山形押型文とナデ消しによる無文帯	10YRにぶい黄緑64	10YRにぶい黄緑53	a2b3e2f3	Vh類
72	B区	口縁部	横走り山形押型文	10YRにぶい黄緑74		a2b2e3	Vh類

表2 出土遺物観察表

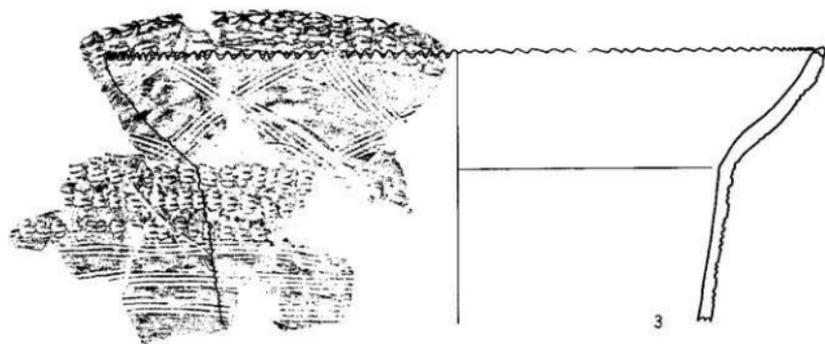
胎土凡例：a (長石) b (角閃石) c (石英) d (長石) e (砂粒) f (白色粒) 1 (大量) 2 (多量) 3 (少量) 4 (微量)

73	B区	胴部	横走り山形押型文	5YR明褐5/8	7.5YRにぶい黄褐5/4	a-2b-2c-4f3	V i類
74	B区	胴部	横走り山形押型文		10YRにぶい黄褐7/4	a-2	V i類
75	B区	口縁部～	横走り山形押型文、内面に原条条痕と同押型文、ケズリ後ナデ	10YRにぶい黄褐7/3	10YRにぶい黄褐7/4	a-2b-2c-3f3	V j類
76	B区	口縁部～	横走り山形押型文、口縁部内面に原条条痕、以下は同押型文 内面ケズリ後ナデ	10YRにぶい黄褐6/4	7.5YRにぶい黄6/4	c-2d-2e-3	V k類
77	B区	胴部	横走り山形押型文、内面ケズリ後ナデ	10YR明黄褐7/6	10YR黄褐8/6	a-2b-2e-2f3	V l類
78	B区	胴部	横走り山形押型文、内面ケズリ後ナデ	10YRにぶい黄褐7/4	10YRにぶい黄褐7/4	a-2b-2e-2f3	V l類
79	B区	胴部	横走り山形押型文、内面ケズリ後ナデ	10YRにぶい黄褐7/4	10YRにぶい黄褐7/4	a-2b-2e-2f2	V l類
80	B区	～底部付近	横走り山形押型文、内面ケズリ後ナデ	5YR橙6/6	10YRにぶい黄褐7/4	a-2b-2e-3	V l類
81	B区	～底部	横走り山形押型文	7.5YR橙6/6	2.5Y浅黄7/3	b-2c-2f3	V l類
82	B区	口縁部～	格子目押型文後ナデ消しによる無文帯、内面はケズリ	5YR明赤褐5/6	5YRにぶい赤褐5/4	a-2b-3e-3f3	V m類
83	B区	胴部	格子目押型文後ナデ消しによる無文帯、内面はケズリ後ナデ	5YR明赤褐5/6	5YRにぶい赤褐5/4	a-2b-3e-3f2	V m類
84	B区	胴部	格子目押型文後ナデ消しによる無文帯、内面はケズリ後ナデ	7.5YR明赤褐5/6	7.5Yにぶい橙7/4	a-2b-2c-4f2	V m類
85	B区	胴部	格子目押型文後ナデ消しによる無文帯、内面はケズリ後ナデ	5YR明赤褐5/6	7.5Yにぶい橙7/4	a-2b-3f3	V m類
86	B区	胴部	格子目押型文後ナデ消しによる無文帯、内面はケズリ後ナデ	5YR明赤褐5/6	10YRにぶい黄橙6/4	a-2b-3e-2	V m類
87	B区	胴部	格子目押型文後ナデ消しによる無文帯、内面はケズリ後ナデ	7.5YR明赤褐5/6	5YRにぶい赤褐5/4	a-2b-3c-3e-3	V m類
88	B区	口縁部～	貝殻連続刺突文と貝殻条線文、内面は条痕一部ナデ	10YRにぶい黄褐6/4	2.5Y暗灰黄4/2	c-2d-3e-2f3	V n類
89	B区	口縁部～	貝殻押しき文と条線文、内面は条痕一部ナデ	10YR黒褐2/2	10YR灰黄褐6/2	c-2d-2e-2	V n類
90	B区	口縁部～	貝殻押しき文と貝殻条線文、内面はケズリ	5YRにぶい黄橙7/4	5YR灰褐5/2	a-2b-3e-2f3	V n類
91	B区	口縁部～	貝殻押しき文とヘラ状原条線文、内面はナデ	10YRにぶい黄橙6/3	7.5YR橙6/6	a-3b-3d-3e-2	V n類
92	B区	口縁部～	貝殻押しき文とヘラ状原条線文、内面はナデ	10YRにぶい黄橙6/3	10YRにぶい黄褐6/4	a-3b-3c-2	V n類
93	B区	頸部～	貝殻押しき文とヘラ状原条線文、内面はナデ		2.5Y浅黄7/4	b-4c-2d-3e-2	V n類
94	S-13	胴部	貝殻押しき文と貝殻条線文、内面はケズリ	5YR橙7/6	10YRにぶい黄褐6/4	a-2b-3e-2f3	V n類
95	B区	口縁部付近	貝殻連続刺突文とヘラ状原条線文、内面はナデ	2.5YR橙6/6	5YR橙7/6	a-3b-3e-3	V n類
96	B区	胴部	貝殻押しき文、内面はケズリ		7.5YRにぶい黄褐5/3a-2b-4e-3		V n類
97	B区	頸部～	貝殻押しき文と貝殻条線文、内面は条痕後ナデ	10YRにぶい黄橙7/3	10YR灰黄褐6/2	a-2b-3c-2e-2	V n類
98	B区	胴部	貝殻押しき文、内面は摩滅により不明	7.5YR黒1/1	10YRにぶい黄橙7/4	a-2e-3f-2	V n類
99	B区	胴部	条線文、内面は摩滅により不明	7.5YRにぶい黄橙7/4	10YR明黄褐7/6	a-2b-2e-2f3	V n類
100	B区	胴部	貝殻条線文、内面は条痕後ナデ	7.5YR橙6/6	10YRにぶい黄橙6/4	a-2b-2c-3e-2	V n類
101	B区	胴部	貝殻条線文、内面はケズリ	5YR明赤褐5/6	7.5YR褐4/3	a-2b-3e-3f3	V n類
102	B区	胴部	貝殻条線文、内面はケズリ	2.5YR橙6/6	5YR灰褐5/2	a-2b-2e-2f3	V n類
103	B区	胴部	貝殻条線文、内面はナデ	10YR浅黄橙8/4	2.5Y浅黄7/3	a-2c-2e-3f3	V n類
104	B区	口縁部～	貝殻押しき文と斜格子状沈線、内面はナデ		10YRにぶい黄橙7/4	a-2b-2c-4e-3	V n類
105	B区	胴部	貝殻押しき文と斜格子状沈線、内面はナデ		10YRにぶい黄橙7/4	a-2b-2c-4e-3	V n類
106	B区	胴部	貝殻押しき文と斜格子状沈線、内面はナデ		10YRにぶい黄橙6/4	a-3c-4d-2e-2	V n類
107	B区	口縁部～	条線文と撫糸文帯、内面はナデ		10YRにぶい黄橙7/3	a-2b-2e-2	V n類
108	B区	胴部	撫糸文帯、内面はナデ		2.5Y浅黄7/4	a-2b-3c-3f3	V n類
109	B区	胴部	横位の並行沈線と波状の並行沈線、内面はナデ		2.5Y浅黄8/4	a-2b-3e-3f3	V n類

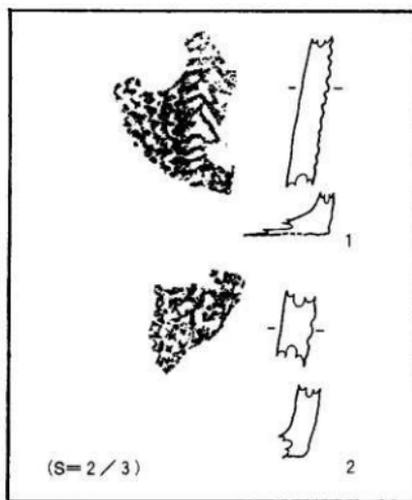
表3 出土遺物観察表



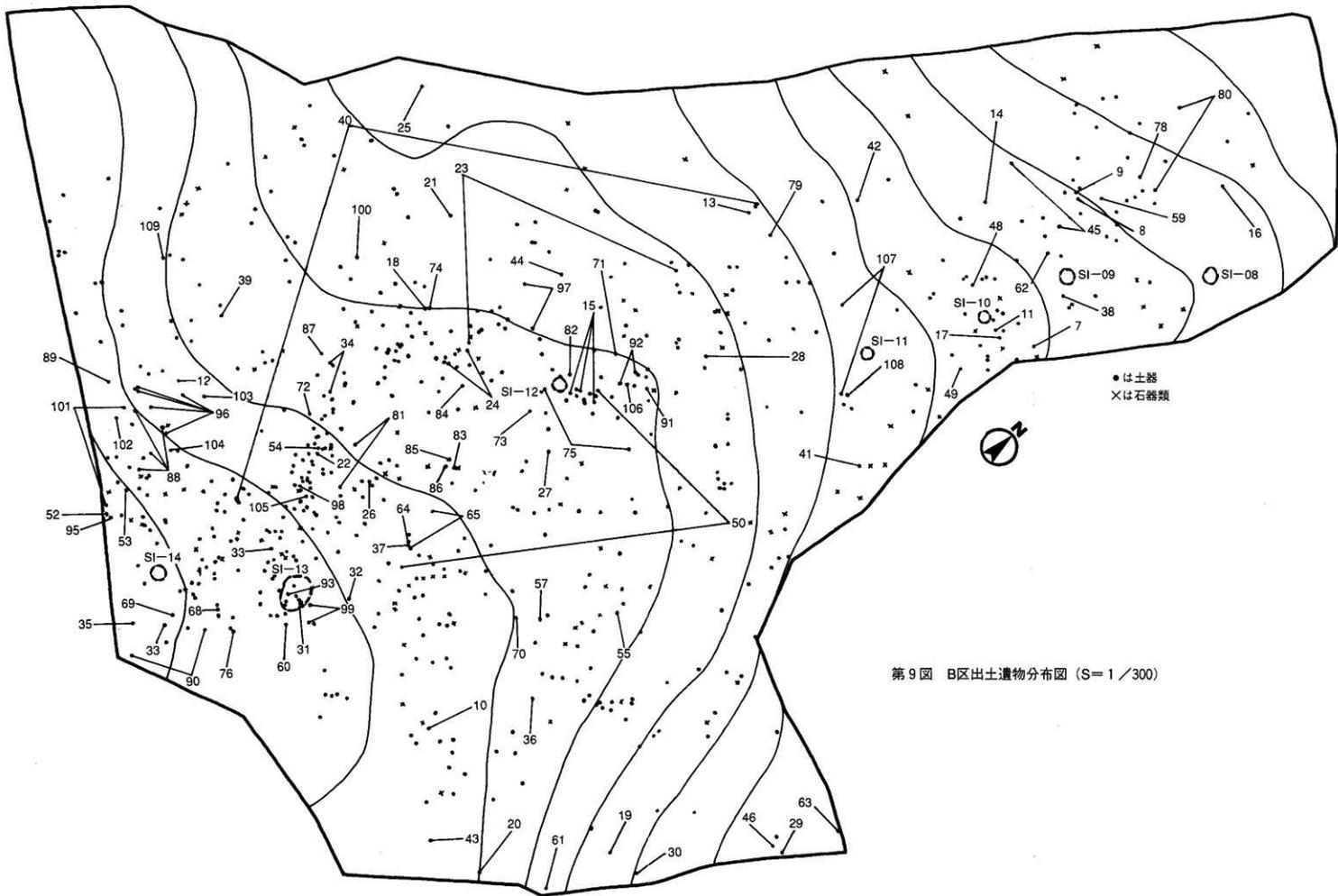
第7図 A区出土遺物分布図



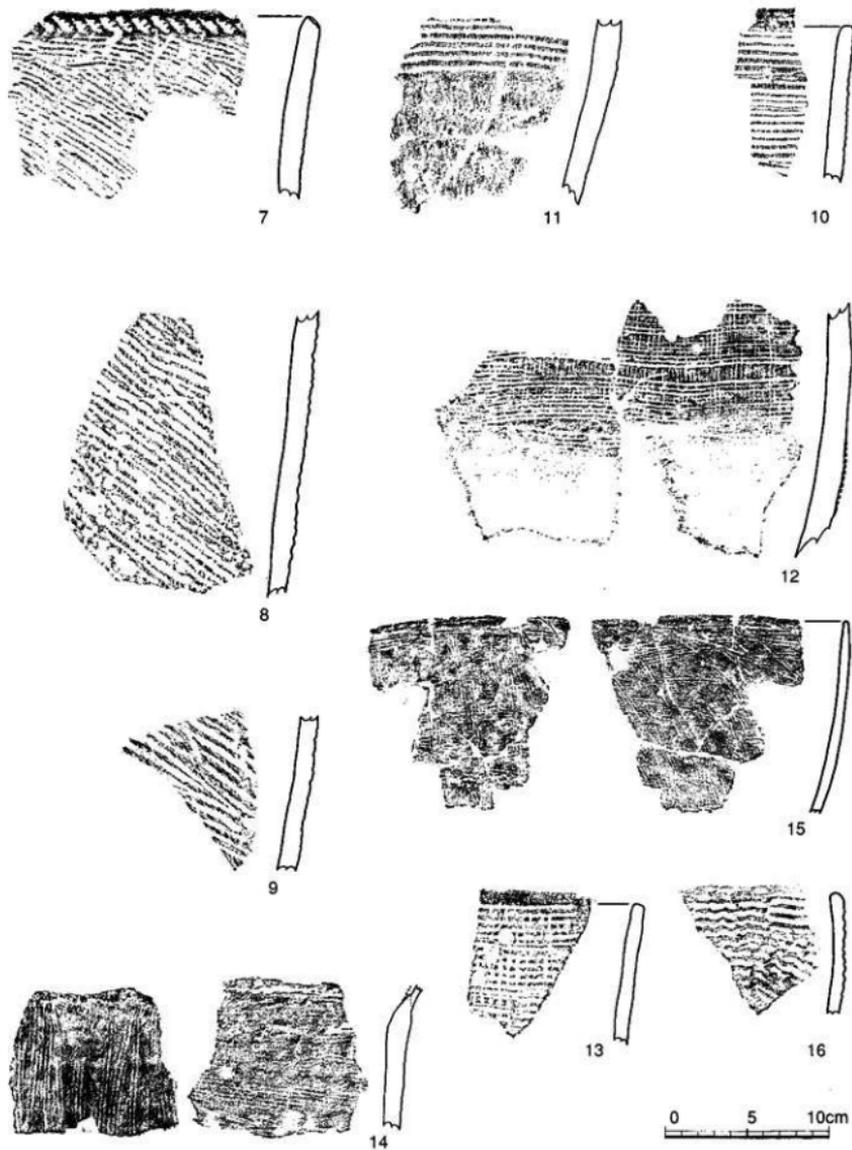
0 5 10.0m



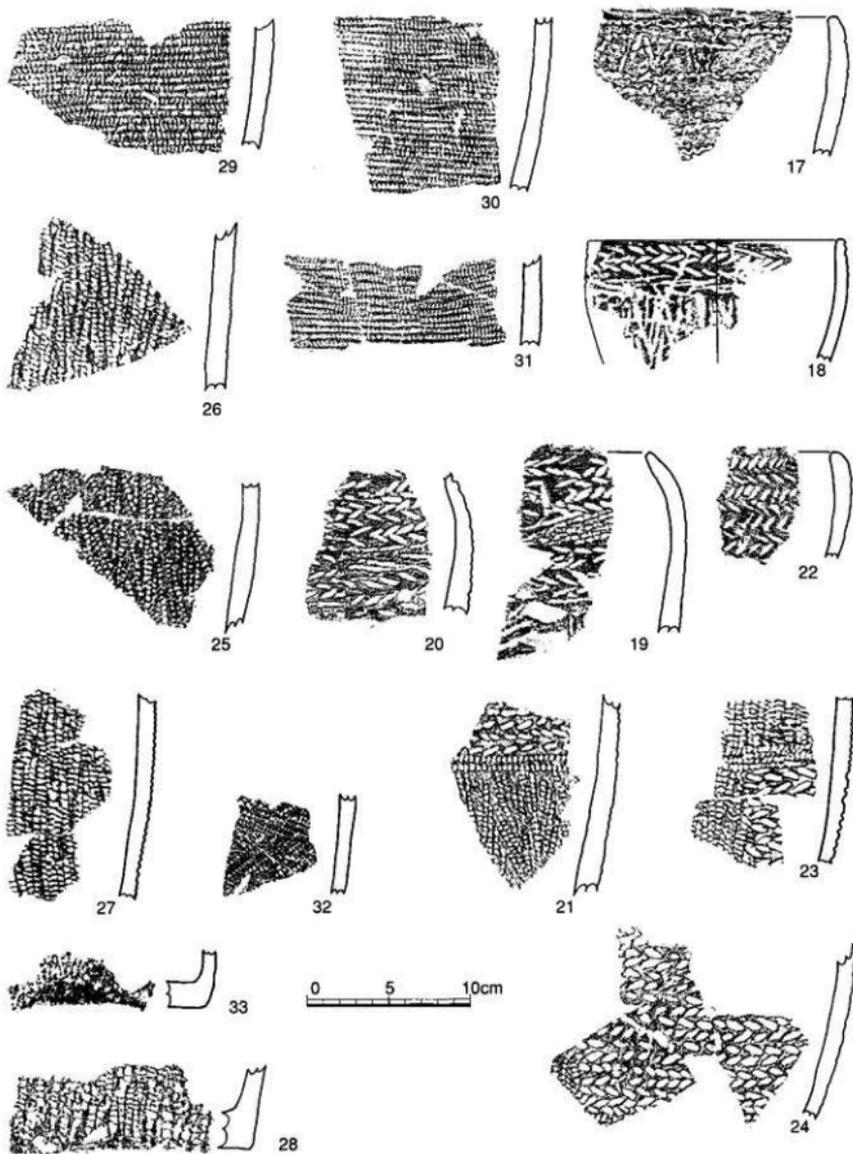
第8図 出土遺物実測図 (A区の土器)



第9図 B区出土遺物分布図 (S=1/300)

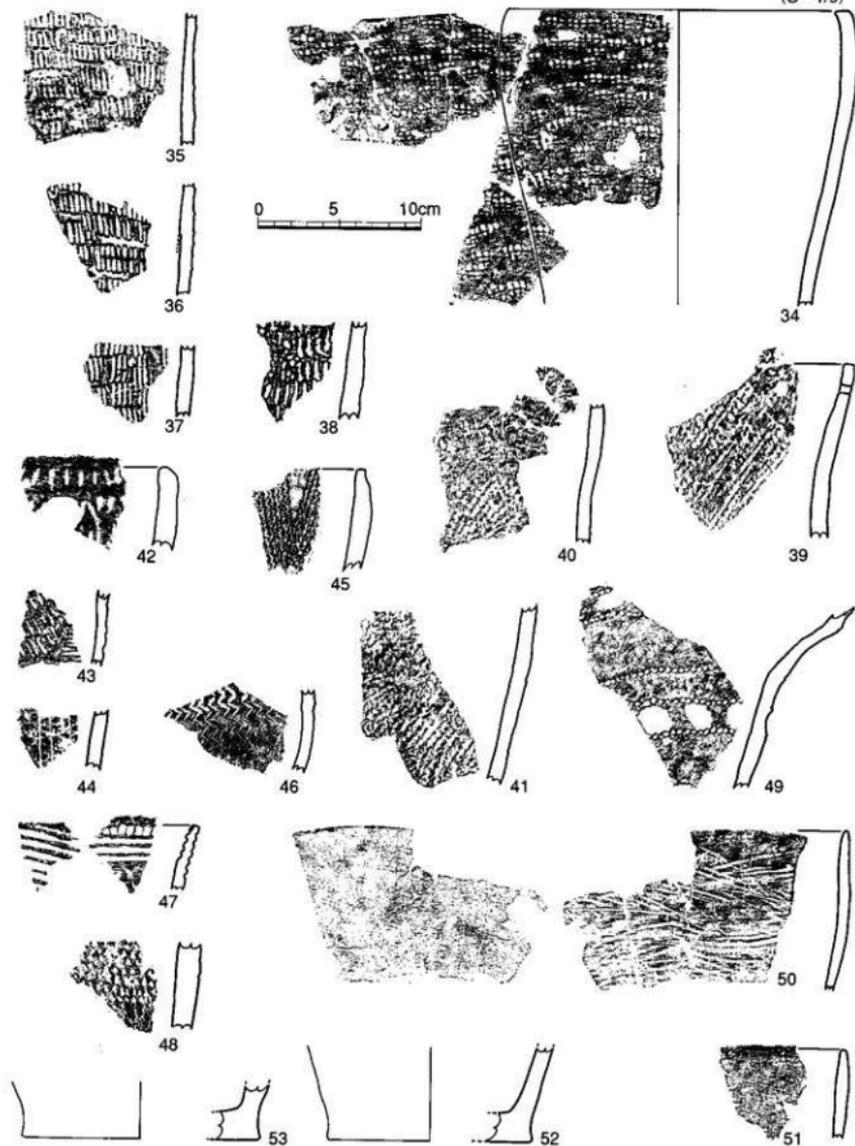


第10図 出土遺物実測図 (B区の土器)

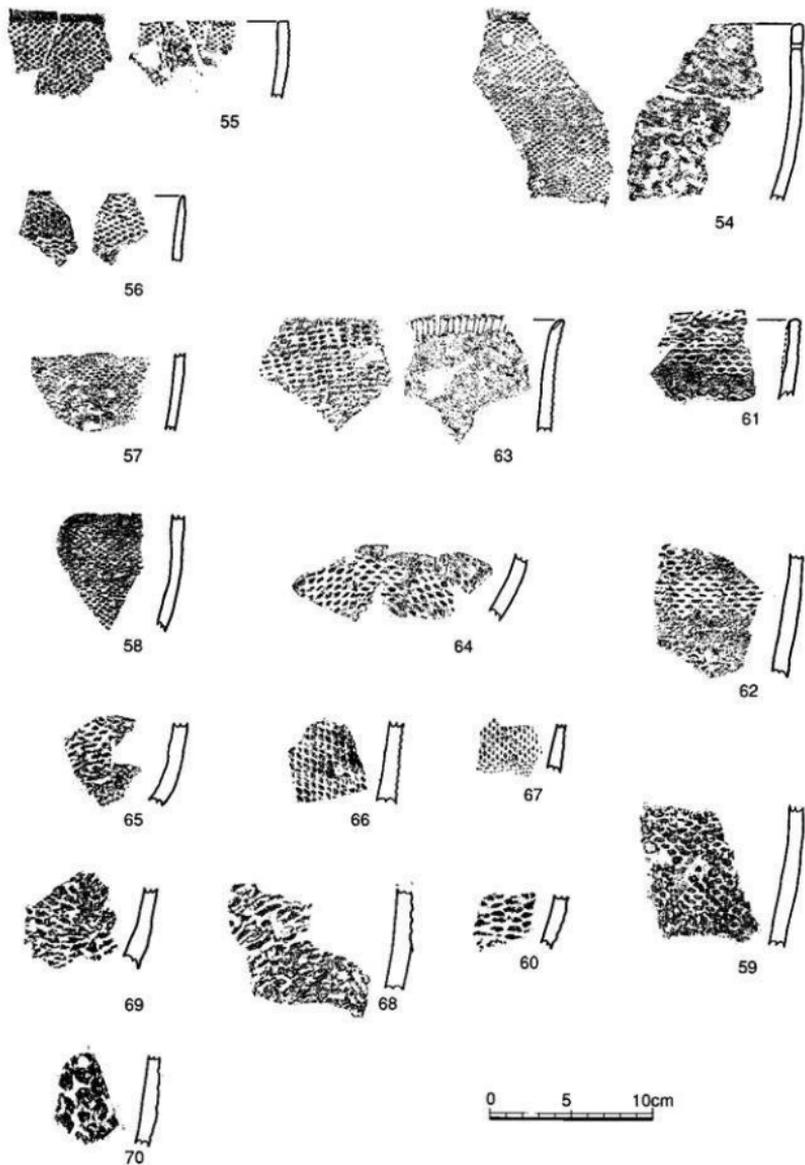


第11図 出土遺物実測図 (B区の土器)

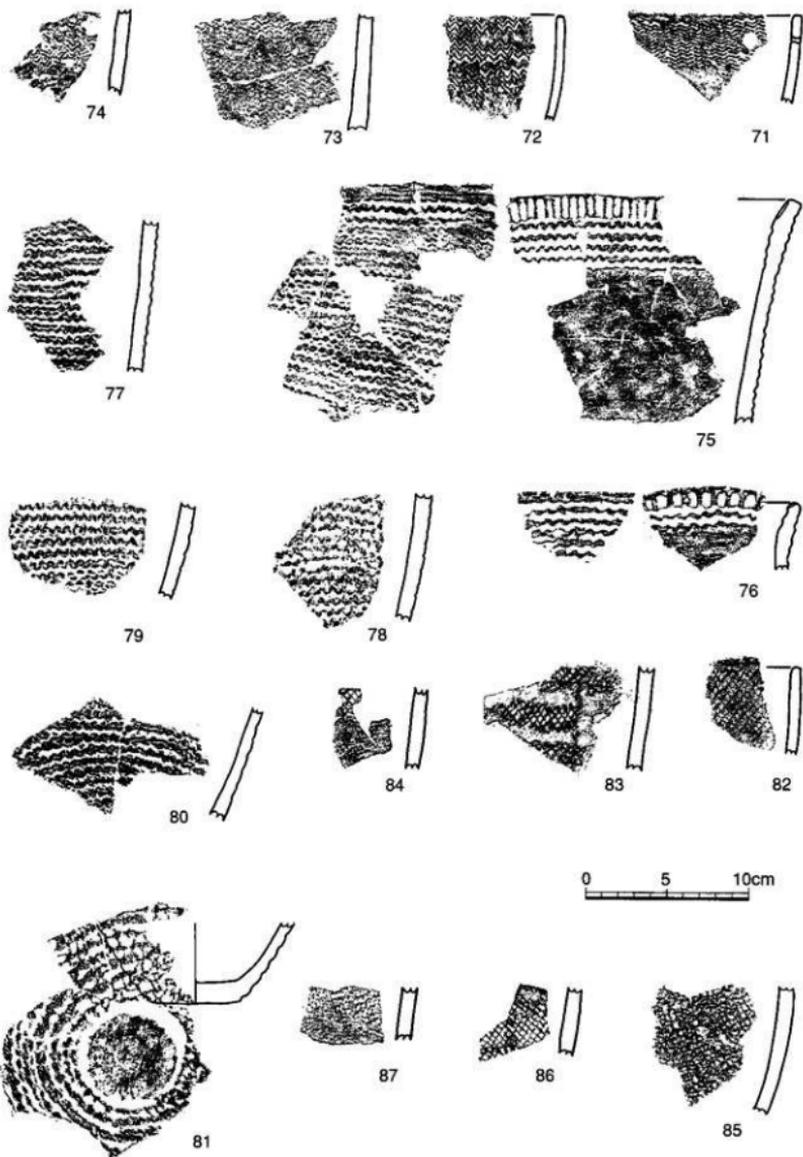
(S=1/3)



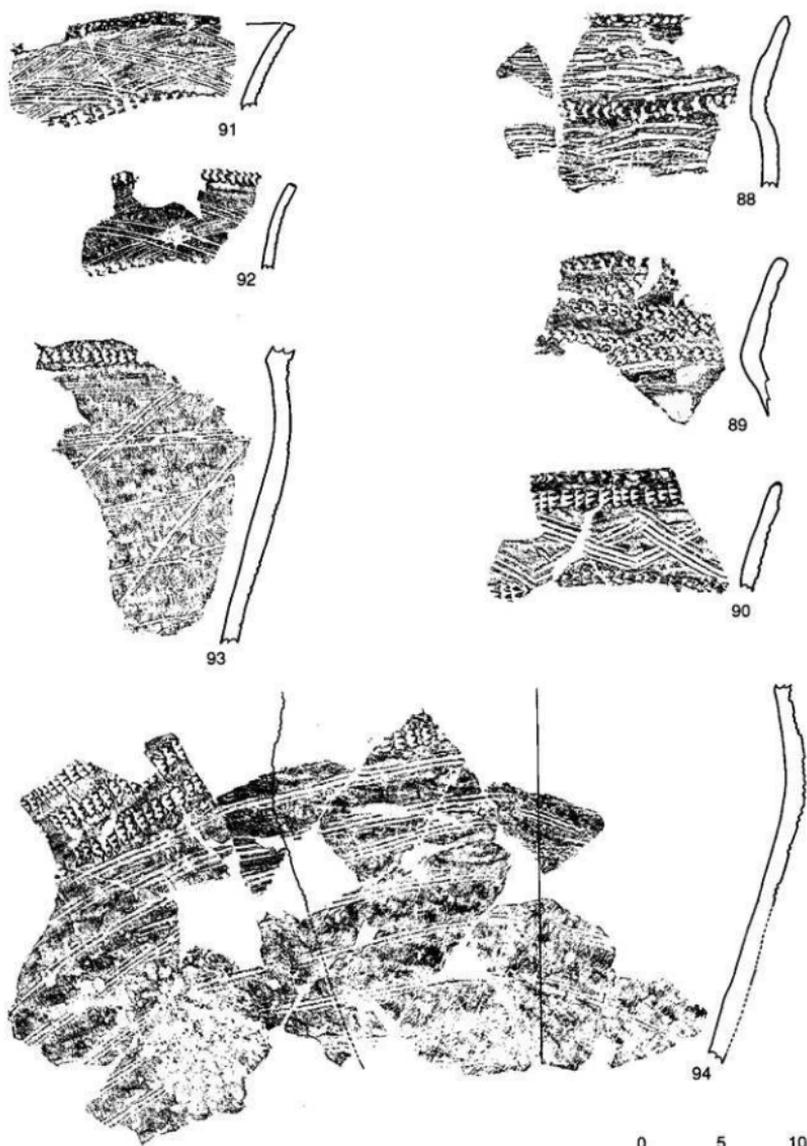
第12図 出土遺物実測図 (B区の土器)



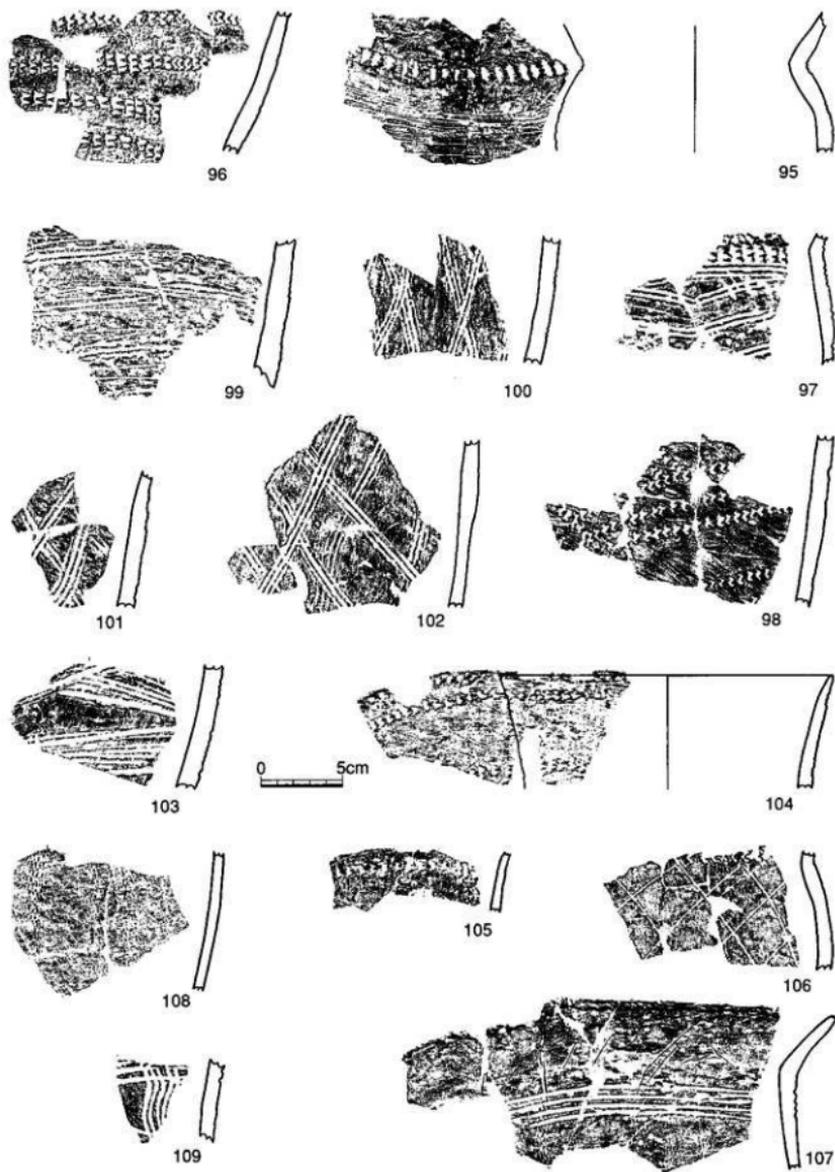
第13図 出土遺物実測図 (B区の土器)



第14図 出土遺物実測図 (B区の土器)



第15図 出土遺物実測図 (B区の土器)



第16図 出土遺物実測図 (B区の土器)

第4節 出土遺物(石器)

出土した石器は、石鏃、スクレイパー、剥片、石核、石斧、磨石等である。以下、器種ごとに説明を加えたい。

石 鏃 (111~169)

石鏃は製品48点、未製品11点であった。形態的には基部に挟りを有するものが大部分を占めるが、挟りはV字状になるもの若しくは挟り気味となるものがほとんどであり、北部九州において早期押形土器に相伴するとされる挟りがU字状になり脚部が四角形を呈する鋳形鏃は認められなかった。また(134・139)は挟りを持たないものである。(134)は厚手であり未製品の可能性もあるが、139は二等辺三角形形状を呈する三角鏃と考えられる。(111~134)までは完形品であるが、それ以外は欠損品である。なお(157・158)の2点は片脚部の欠損後に調整をおこなったいわゆる再利用の認められる遺物である。

(158)は欠損部に調整をおこない残存部のうちの尖端部のみを用いて再度石鏃として完成させようとした意図が窺える。一方(157)は脚部の欠損後に欠損部のみならず尖端部にも調整をおこない、残ったもう片方の脚部を尖端部としたようである。ただし、全体において剥離が大きいため、脚部の欠損が石鏃を完成させた後であったかは定かでない。また、再利用もその工程を完了した後では認定が不可能であるため、完成品の中にもこの類の遺物が混入していると思われる。

石材は(111~116・128・133・134・137・138・143・150・153・155~157・163~165)が姫島産黒耀石、(117~119・127・148)が西南九州産黒耀石、(120~124・135・136・139~142・144・147・151・154・158・166~169)がチャート、(125・126・131・145・152・159~162)がサヌカイト質安山岩、(130・132)が流紋岩、(146)が硬質頁岩、(129)が凝灰岩質の石材、(149)が玉髓である。

スクレイパー (170~173)

(170~172)は連続的な剥離作業をおこなった縦長剥片の縁辺部に調整をおこない刃部を作出したものである。(170)は剥片の末端部のみであるが、(171)はそれに加え裏面右側部にも表面から剥離をおこなう。(172)は上部を折損しているが、その後表面上部に見られる調整をおこなっており、再利用を図ったものと考えられる。(173)は横長剥片の下端部を刃部に設定している。石材はいずれも流紋岩である。

剥 片 (174)

遺跡では流紋岩製の剥片が若干量出土している。観察してみると、いずれも剥離の方向に規則性はなく、剥離作業に際しての意図を推測し難い。当調査区内では旧石器時代にあたる遺物も少量出土しているが、剥離の方向より縄文時代の遺物とみて間違いのないようである。これはその内の1点である。

石 核 (175・176)

(175)は不規則の剥離を全面におこなった石核である。工程を復元すると、まずa面下部の剥離をおこなったのち、打面を移しc面に求心状の打撃をおこなう。次いでb面下部に剥離痕を残すが、これは作業の結果生じた突出部を削除したものである。その後b上部に小規模な調整、最後にa面上部に小規模の剥離をおこなう。これは剥片剥離を更におこなおうとした際の頭部調整と考えられる。また(176)はc面→a面の順で剥離をおこなったものであるが、

a面の周縁に残る小規模な調整の剥離角は頭部調整というよりも刃部作出であり、石核としての利用価値を喪失したのちスクレイパーとして転用した意図が窺える。

石 斧 (177~181)

(177)は薄手の石斧である。下部は丁寧な磨きが施されており、刃部も鋭く作出される。石材は全体的に青みを帯びており、部分的に節理面が顕著に認められる。おそらく板状の礫の周縁に簡単な打撃をおこない成形したのちに磨いたものと考えられる。(178)は求心状に剥離し成形した後に磨きを施した石斧である。裏面中央部の剥離痕は、素材時のものであろう。砂岩製であり、ローリングを全面に受けているため観察は明確でない。(179)は硬質頁岩製である。上端部の数枚の剥離痕以外は、入念な磨きにより摩滅している。(180)の裏面は、磨きにより刃部が作出されているが、表面の剥離は通常の石斧の刃部とは大きく異なる。これは、もともと石斧の上部であったものが表面上部の剥離のとおり折損してしまったため、上下を逆にして基部を刃部に加工し直したためと考えられる。軟質な砂岩製であり、ローリングが激しい。また(181)は大まかな剥離を施し形状を整えた後に磨いて製作しようとしたものである。凝灰岩と硬質な石材を用いたためか、作業途中で放棄している。

磨 石 (182~196)

当遺跡では磨石が43点と数多く出土している。しかし、この中には被熱しているために焼礫に転用、もしくはその逆のものも含まれると考えられ、ここでは純粹に磨石として使用された遺物のみを図示した。このうち、県内の先史遺跡において多用される尾鈴山産の石材は(185・190・194)の3点であり、その他は在地の火山岩製の円礫である。これらは大きさの統一性に欠け、特に小さいものは(196)のように径が3cm程度のものもある。また、形態的にも楕円形から円盤状のものなど様々である。なお、スクリーントーンの部分は使用の際の摩滅により器面が滑らかになった部分である。

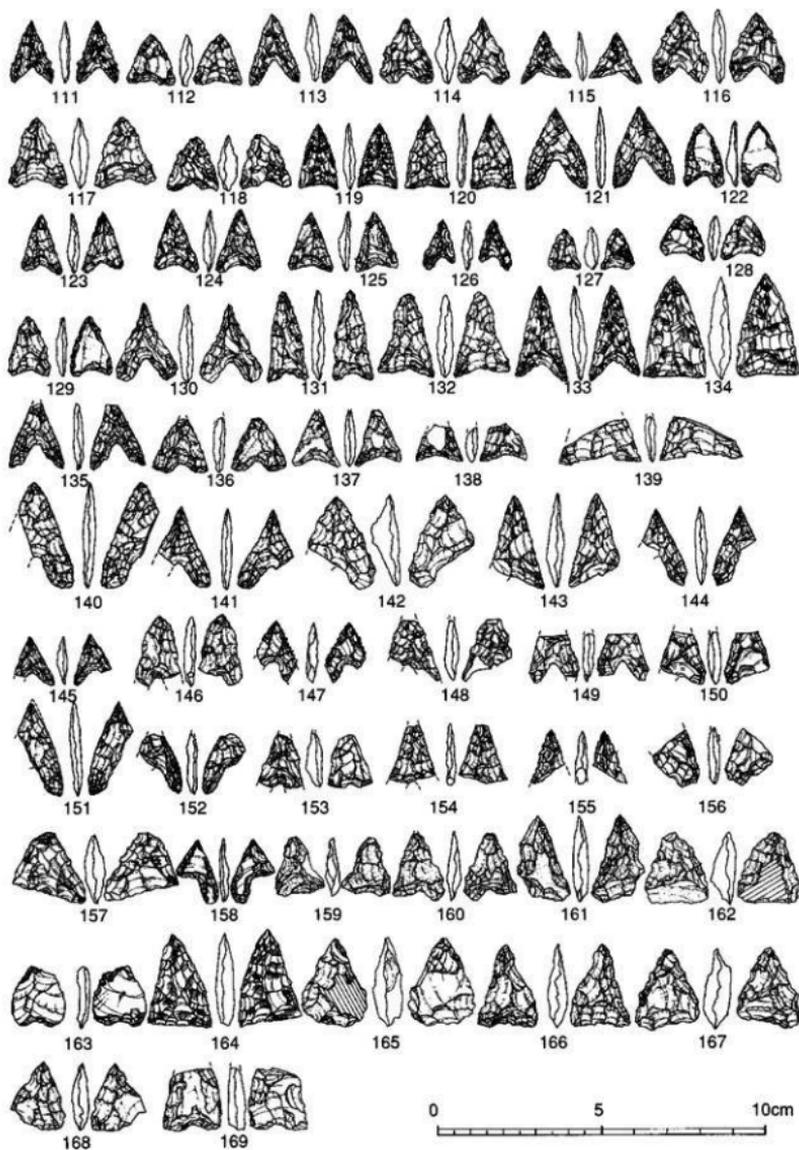
用途不明石器 (197~200)

(197)は細長い礫を使用したものである。恐らく手に持ち下端部を対象物に打ち付けた磨石の一種であろうと考えられ、そのため下端部には使用痕も認められる。しかし柄部と推測される部分にも使用痕が残されており、用途を図りかねる。(198)は擦痕の残る小礫である。礫の下端部は比較的平坦な面が形成されているが、その部分には使用痕は認められない。(199)は礫の縁辺部に沿って散打痕が認められ、部分的に擦痕が深く残される。(200)は円形の礫である。使用痕は残されておらず、裏面は同心円状に輪が巡っている。

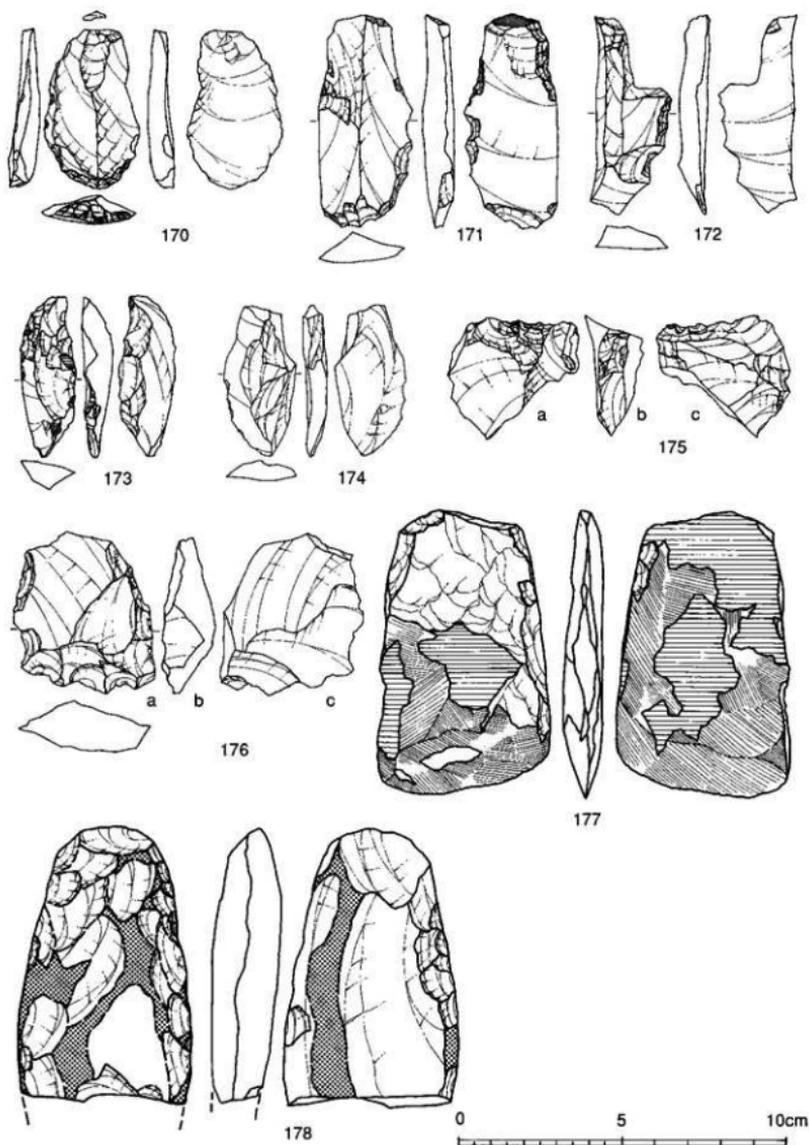
以上のような状況を踏まえると、石礫には黒曜石は主に安山岩質、チャートで占められ、スクレイパーは流紋岩を使用するという傾向が認められることから、それぞれの器種に合わせて選択される石材に隔たりが存在したことが考えられる。

	霧島産黒曜石	距離産黒曜石	チャート	安山岩質	激紋岩質	頁岩(黒色)	頁岩(白色)	その他
重量(g)	290	310	390	100	1180	310	220	10
割合(%)	10.3	11.0	13.9	3.6	42.0	11.0	7.8	0.4

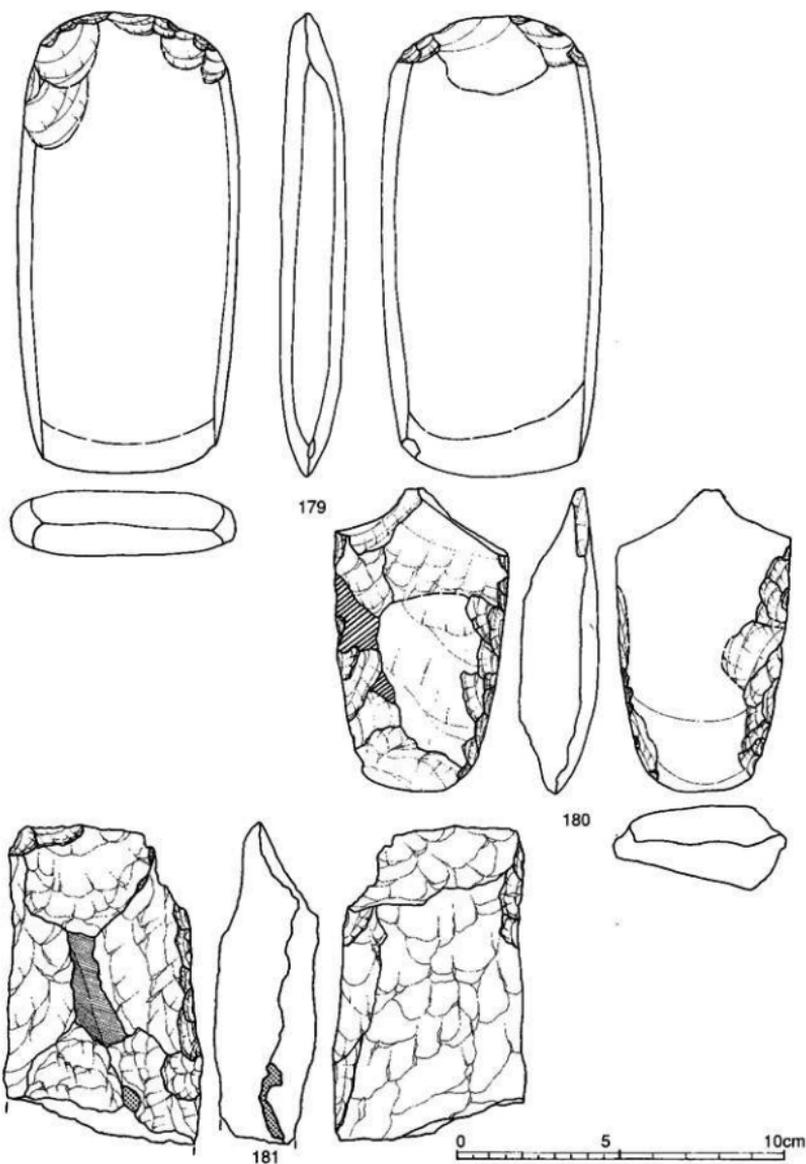
出土剥片の重量及び割合



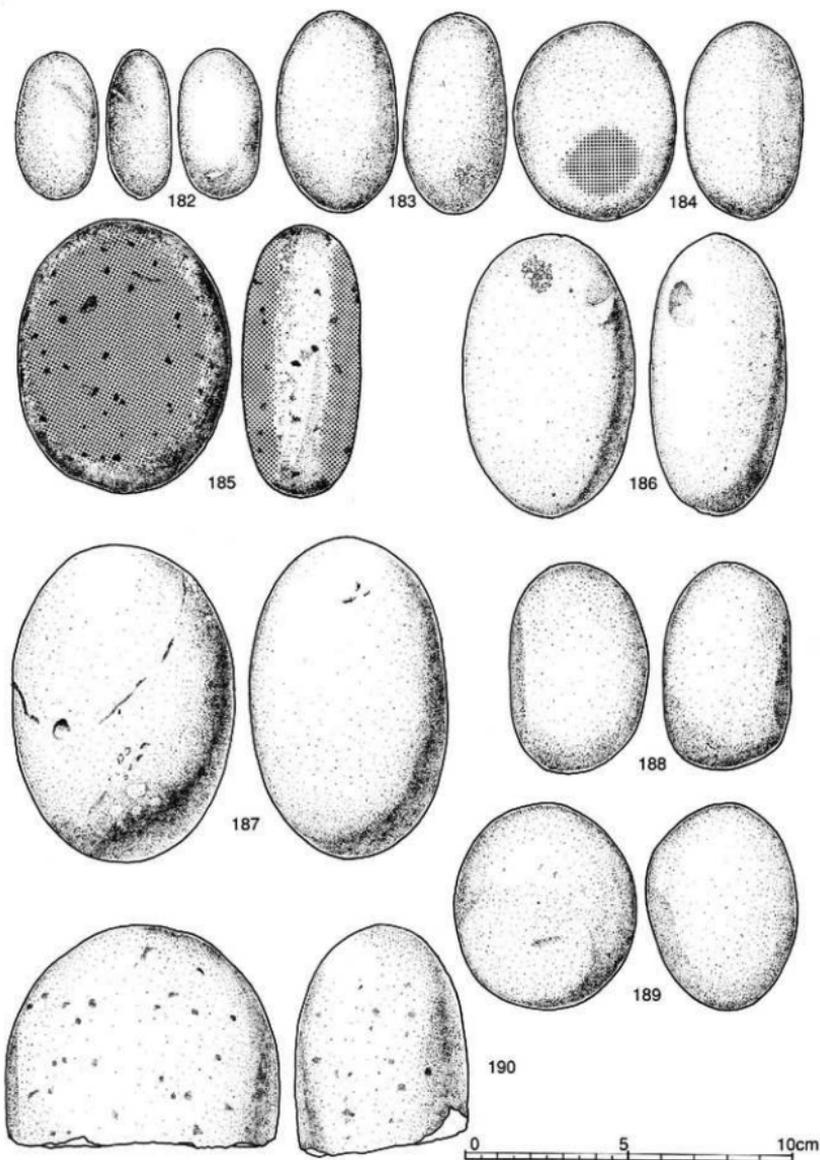
第17図 出土遺物実測図(石 鏃)



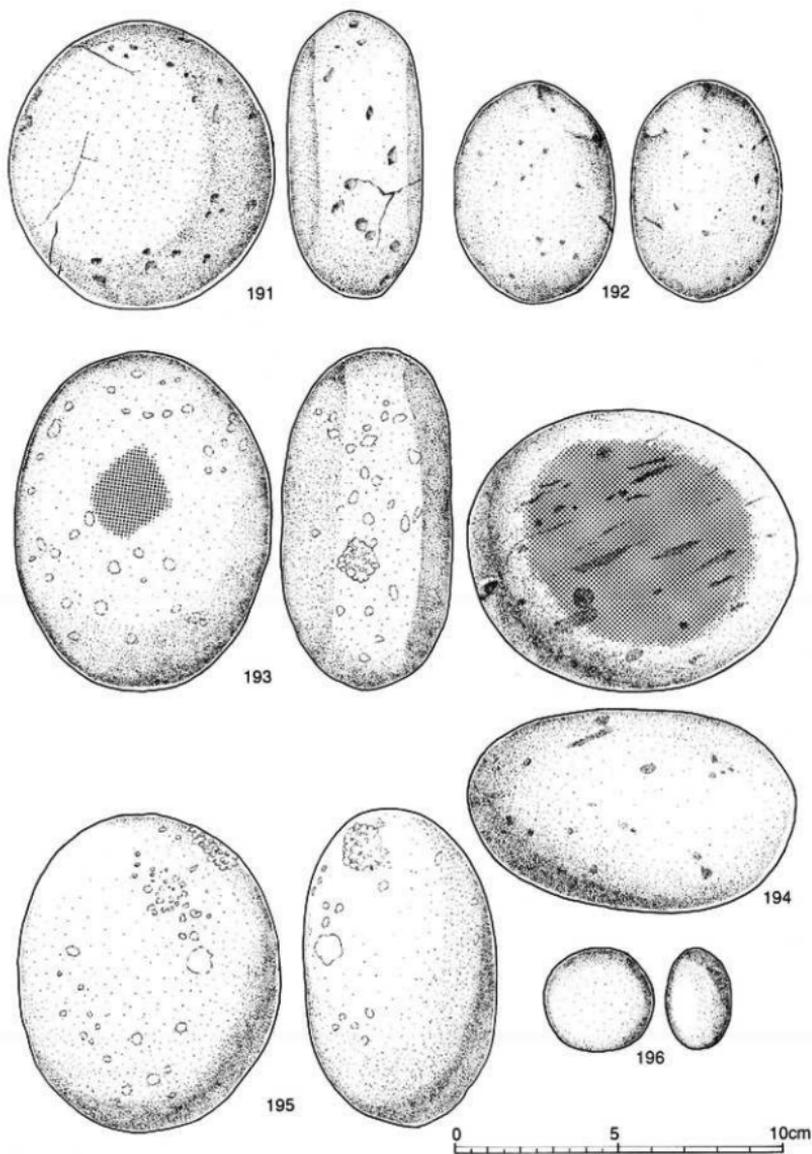
第18図 出土遺物実測図 (石斧ほか)



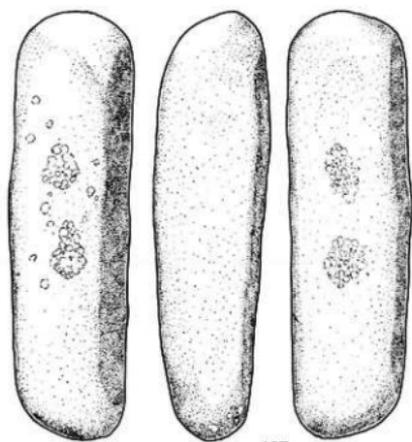
第19図 出土遺物実測図(石斧)



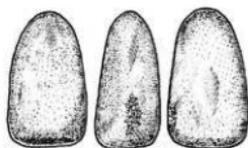
第20図 出土遺物実測図(磨石)



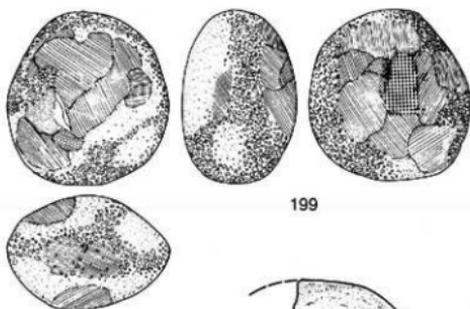
第21図 出土遺物実測図 (磨石)



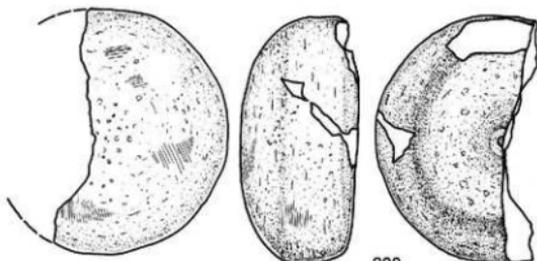
197



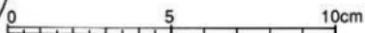
198



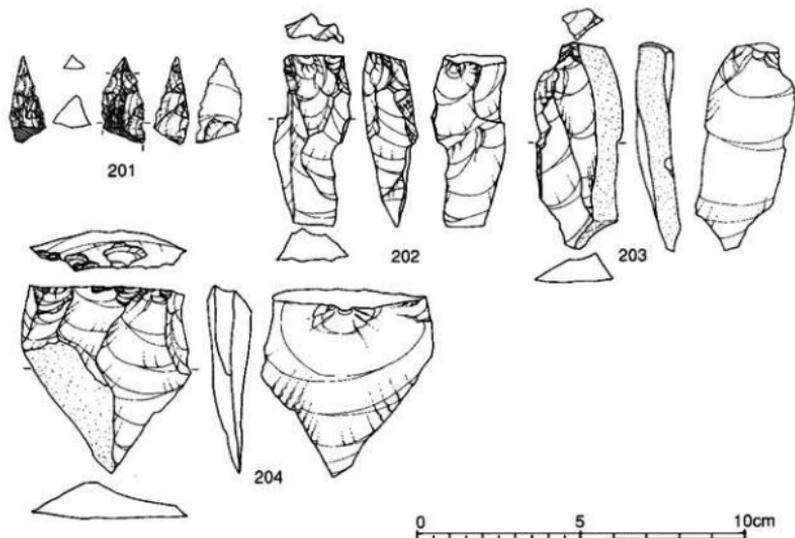
199



200



第22図 出土遺物実測図 (用途不明石器)



第23図 出土遺物実測図（旧石器）

第5節 旧石器時代の遺物

本調査においては、旧石器時代の遺物包含層を確認していない。これらは縄文時代早期の文化層から出土したものである。石材はいずれも流紋岩である。

三稜尖頭器（201）

三稜尖頭器の先端部である。厚手の縦長剥片を素材とし、剥片の裏面からの打撃により調整を施す。剥離は二面からであり、平坦面にはおこなわれない。また、稜上からも数度にわたる調整がおこなわれている。断面は二等辺三角形形状となる。

剥片（202～204）

202は縦長剥片を連続的に剥離する際に作出された厚手の剥片である。表面に複数の剥離痕があることから、縦長剥片を連続的に剥離し打面が後退した結果、この部分が突出し、石核を再度成形するために削除された部分であったと考えられる。203は礫面的一端に打撃をおこなって自然面を除去し、その時の剥離面を打面として連続的に剥片剥離作業をおこなう工程中に作出されたもので、表面右側部には自然面が残されることから、作業工程のなかでも初期段階に生じたものであろう。204は礫面を二分割し、それによって形成された平坦面を打面として連続的に剥離作業をおこなった際の剥片である。表面左側部に自然面が認められる。大きさに比べ薄手であるため、打角補正の可能性も考えられる。

第三章 自然科学分析調査の結果

～鹿毛第3遺跡の火山灰分析～

第1節 はじめに

宮崎県中部の後期旧石器時代以降に形成された火山灰土中には、始良火山や桜島火山さらに霧島火山などから噴出したテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡において求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっていく。そこで年代の不明な遺構の認められた鹿毛第3遺跡の遺構覆土についてテフラ検出分析を行い、遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった遺構はSC-01である。

第2節 テフラ検出分析

(1) 分析資料と分析方法

SC-01の覆土は、発掘調査担当者により4層に区分されている。これらのうち分析には、発掘調査担当者によりテフラ粒子の混在が認められた下位より2層目（試料番号2）と3層目（試料番号3）が対象として選択された。テフラ検出分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄器により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試料番号2にはスコリア（最大径7.3mm）がとくに多く含まれている。スコリアの色調は、暗褐色や暗灰色である。このスコリアについては、屈折率測定を行って示標テフラとの同定の精度を向上させることにした。試料番号3にも、スコリア（最大径3.6mm）が多く含まれている。スコリアの色調は、暗褐色や暗灰色で、試料番号2にとくに多く含まれているスコリアと同様にテフラに由来するものと考えられる。なおこの試料には、スポンジ状によく発泡した白色軽石（最大径2mm）が認められる。この軽石は、その岩相から1417（文明3）年に桜島火山から噴出した桜島3テフラ（S_z-3, 小林, 1986, 町田・新井, 1992）に由来するものと考えられる。

第3節 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

試料番号2にとくに多く含まれるスコリア粒子について、位相差法（新井, 1972）によって屈折率測定を行い、示標テフラとの同定に関する資料の収集を試みた。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表2に示す。試料番号2に含まれるスコリアの火山ガラスの屈折率（ n ）は1.570-1.576である。重鉱物としてはカンラン石や単斜輝石がごく少量認められる。重鉱物の中にテフラ同定のための屈折率測定の対象にできる鉱物は認められなかった。

試料番号2にとくに多く含まれるスコリアについては、その特徴から9～13世紀に霧島火山

高千穂山から噴出した霧島高原スコリア (Kr-ThS, 井ノ上, 1988, 早出, 1997未公開試料) に由来すると考えられる。分析担当者は、現地においてその産状を観察できなかったために、その降灰層準に関して詳しく言及できない。しかし、その上位の試料中にSz-3に由来すると思われる軽石が認められたことから、SC-01については少なくともSz-3より古い可能性が考えられる。

第4節 まとめ

鹿毛第3遺跡において検出された遺構SC-01の年代に関する資料を収集する目的で、テフラ検出分析と屈折率測定を行った。その結果、遺構覆土中より霧島高原スコリア (Kr-ThS約10~13世紀) と桜島3テフラ (Sz-3, 1471年) に由来する可能性の大きいテフラ粒子が検出された。

文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフラテクノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
- 井ノ上幸造 (1988) 霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史。岩鉱, 83, p.26-41.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 奥野 充 (1996) 南九州の第四紀末テフラの加速器 C年代 (予報)。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, VII, p.89-116.

表1 テフラ検出分析結果

試料	スコリア・軽石		
	量	色調	最大径
3	+++	暗褐, 暗灰>白	3.6, 2.0
2	++++	暗褐, 暗灰	7.3

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない。最大

表2 屈折率測定結果

試料	スコリア	重鉱物	
	火山ガラス(n)	組み合わせ	斜方輝石の屈折率(γ)
2	1.570-1.576	(ol, cpx)	-

重鉱物の () は量の少ないことを示す。ol: カンラン石, cpx: 単斜輝石。

屈折率の測定は、位相差法 (新井, 1972) による。

*本章は、田野町が株式会社古環境研究所に委託し報告を受けた『鹿毛第3遺跡の火山灰分析』『田野町鹿毛第3遺跡の自然化学分析』自然化学分析調査報告書 株式会社 古環境研究所 1997 を転載したものである。

第IV章 ま と め

第1節 出土遺物の概観

本遺跡は旧石器時代、縄文時代早期と中世以降の複合遺跡であることを調査によって明らかにすることができた。

旧石器時代は遺物の所在を確認したのみにとどまり、いずれも縄文時代早期の遺物包含層より出土したものであることから時期等の詳細は明確にできなかったが、木根による攪乱は当地で一般的にみられるA T堆積層以下には至っておらず、これより上層にあったものと推察される。三稜尖頭器が1点と縦長剥片が3点出土した。本遺跡出土資料の大半を占めるのが縄文時代早期である。これら土器の出土状況についてであるが、A区においては別章で述べたとおり圧倒的に優位を占める塞ノ神式土器が部分的に集中して出土した。これに対してB区ではSI-13において塞ノ神式土器が良好な出土状況をみせた他は、全体をとおして出土土器の型式に分布上の顕著な偏りは無かった。以下、本文中において掲載し分類した土器について概観しておきたい。

I類は角筒土器である。楔形突帯がみられないものの縦位の貝殻刺突線文を施すことから、吉田式土器⁽¹⁾とみられる。II a類は前平式土器で、II b類は同型式の体部である。II c～II g類は中九州でいうところの円筒形条痕文土器に相当する一群である。III類は下剥峰式⁽²⁾あるいは桑ノ丸式土器⁽³⁾の範疇に捉えたものである。III a類はハの字状の短沈線を施すいわゆる辻タイプとされるもののバリエーションとしておきたい。その他III b類とIII d類～III f類もこれに含まれるが、貝殻押引文との組み合わせであることから貝殻刺突線文との組み合わせであるIII d類及びIII e類とは異なるタイプとして分類した。III c類は縦方向の貝殻押引き文であるが、上記に類するものとして捉えておきたい。III h類は貝殻刺突線文のみで複雑な文様を構成するものであるが、やや内湾ぎみの器形は石板式土器⁽⁴⁾とは異なることから、この一群に収まるものとした。III i類は口唇部を平坦につくり口縁部がやや内湾するもので貝殻刺突文のみを施しており、下剥峰式土器のバリエーションとして捉えておきたい。III j類は櫛羽状原体により施文される桑ノ丸式土器である。IV類は縄文土器であるが、当地で頻繁に出上するものではなく、感覚的な所見であるが焼成及び胎土から移入品である可能性も考えられる。V類はa～gが楕円文、h～lが山形文、mが格子目文で、原体や施文位置及び方向などの違いからさらに細分した。V a類は小粒の横走り楕円文を内外面に施し口縁部内面に原体条痕が無いことから、稲荷山式⁽⁵⁾に相当するものであろう。V b類の一部はV a類に属するもので尖底部付近とみられるものが2点含まれる。V c類は横走り施文ののちナデ消しにより無文帯をつくるものでV h類とV m類にも同様の手法がみられる。これらは川原田式⁽⁶⁾の带状施文との共通性を強く感じさせるものである。V d類は他と比較して原体が粗大であることから田村式⁽⁷⁾またはヤトコロ式⁽⁸⁾とされるものとの関連が考えられる。V e類は楕円文の中で唯一内面に原体条痕跡を有するものである。横走り施文で内面に押型文は無い。早水台式⁽⁹⁾との並行関係が考えられる。V j類とV k類は内外面に横走りの山形文を施し原体条痕跡を有するもので、早水台式⁽⁹⁾との並行関係が考えられる。V l類はこれらに属するものであるが、底部は平底である。V f類は縦走りの楕円文、V g類は縦走りと横走りの楕円文を重複させるものであるが、原体はいずれも小粒である。VI類はいわゆる貝殻刺突の塞ノ神式土器で河口編年の塞ノ神B式⁽¹⁰⁾、新東編年の三代寺式⁽¹¹⁾に属するものである。法量や施文原体及び施文手法にバリエーションがみられるが、いずれも頸部に「く」の

字に屈曲し口縁部は外反するもので円筒形のタイプは無い。Ⅶ類は撫糸文系の塞ノ神式土器で河口編年の塞ノ神A a式、新東編年の椀ノ原式に属するものである。本遺跡において主体的な位置を占めるⅥ類に対してⅦ類は極めて少量の出土にとどまった。Ⅸ類は上記の分類に含めることを控えたものである。Ⅹa類は無文土器であるが薄手であること以外に特徴はみられず、どの型式に伴うものなのかは特定できない。Ⅹb類は貝殻刺突線文と内面のケズリ調整からⅢ類のバリエーションである可能性がある。Ⅹf類は縦走りの山形押型文を沈線文で模倣したものであるが、本遺跡において縦走りの山形押型文は出土していない。Ⅹg類も押型文の施文パターンを模倣したものである。Ⅹh類の刺突列文は平椀式土器のそれを思わせるものであるが、現在のところ類例の見当たらない資料である。

第2節 縄文時代の諸様相 草創期の土器について

本遺跡においては出土していないが、近隣では砂田遺跡⁽⁹⁾で爪形文土器が出土したほか永迫第2遺跡⁽¹⁰⁾でも疑わしいものが2点ある。町内には他に芳ヶ迫第3遺跡⁽¹¹⁾と井ノ尾遺跡⁽¹²⁾で爪形文土器、七野第4遺跡⁽¹³⁾で隆帯文土器、元野河内遺跡⁽¹⁴⁾で両者が出土し、青木遺跡⁽¹⁵⁾では爪形文土器のほか主に種子島地域で出土する隆帯上に貝殻腹縁及び背面で刻み目を施すタイプが表採されており、県内外において注目されつつある。近年、県内における草創期資料は徐々にではあるが増加している。その中で今後注目すべきは川南町の霧島遺跡⁽¹⁶⁾で爪形文土器に伴い出土している無文土器の存在である。この資料は薄手で混入物の少ない密な胎土を有し、焼成も堅く良好に仕上がっており、器形も没個性的である。単独あるいは早期に混入して出土すれば、層位的な確証を得られない限り分類は困難を極めるであろう。町内における無文土器は草創期及び早期の遺跡で少量ではあるが出土している。しかし、現段階では単に「無文土器」として取り扱わざるをえない。これは複合遺跡であったという理由のみならず、層位を詳細に把握した緻密な調査を実施する機が得られないことも多少起因しているように思われる。

岩本式土器について

本遺跡では出土していない。岩本式土器は「口縁部内側に段を作りあるいは削って口唇部を断面三角形に仕上げ、その部分に筒状施文具で刻目を入れることによって小さな波状の口縁部とする。さらに刻目の下には横位の貝殻刺突線文をめぐらす⁽¹⁷⁾」ものであるが、町内での出土資料には、貝殻で刻むものやその下位に横位の貝殻押し文をめぐらすものなどがありバリエーションに富む。近隣では、やはり典型例ではないが砂田遺跡⁽⁹⁾においてこのバリエーションの範疇に入りそうなものが出土している。岩本式土器の編年の位置づけについては、草創期～岩本～前平という流れが概ね認識されつつあるが、宮崎市の山下第1遺跡⁽¹⁸⁾において岩本式の口縁部直下に縦方向の浅い爪形文を伴う土器が報告されており、更にこれを裏付ける資料として注目される。

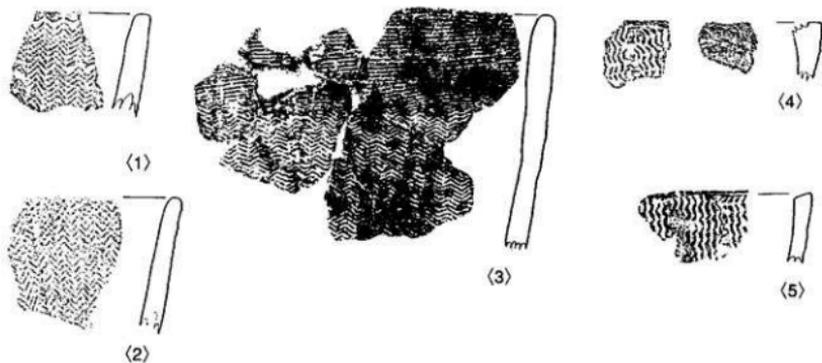
角筒土器について

本遺跡において、細片であるが2点出土した。町内では芳ヶ迫第1遺跡⁽¹⁹⁾・札ノ元遺跡⁽²⁰⁾・又五郎遺跡⁽²¹⁾などの前平地区遺跡群⁽²²⁾で出土して以来、15件の早期遺跡の調査を実施してきたが本遺跡に至るまで細片すら見ることは無かった。角筒土器以外の吉田式系土器の出土例については上記のほか二ツ山第1遺跡⁽²³⁾・高野原遺跡⁽²⁴⁾・元野河内遺跡⁽²⁵⁾と八重地区の前畑第1遺跡⁽²⁶⁾・砂田遺跡⁽²⁷⁾が

ある。しかし、これらの遺跡では破片が数点から十数点にとどまっており、数量ともに前平地区遺跡群が圧倒的に上回っている。このことが角筒土器の少なさにも起因しているのであろう。また、前平地区遺跡群を拠点として他の各遺跡をキャンプサイトとした姿も想定される。

押型文土器について

本遺跡においては川原田式、稲荷山式、早水台式、田村式またはヤトコロ式に相当するものあるいは並行関係が考えられるものが出土した。他に近隣では量的なばらつきはあるものの前知第1・第2遺跡、宮田遺跡、砂田遺跡⁽⁹⁾、永迫第2遺跡などで出土している。いずれも早水台式以降にあたるものが大半である。宮崎県北以南の押型文土器を東九州の編年にそのまま適用することはできないと指摘されてきた。これらを検証するにあたっては、まず移入土器と在地産土器の判別作業も必要と思われるが、この東九州編年との矛盾は当町出土資料にも頻繁に見受けられ、特に早水台式以降にその傾向が強く現れるようである。具体例としては報文中のVj類の外面に横走り内面に横走の押型文と原体条痕を施すものと、これに含まれる平底V1類があげられる。口縁部の形態及び施文方向などから早水台式との並行関係を考えたが底部は尖底ではない。同型式の段階における押型文土器の在地化がすすんでいたことを指摘しうる現象であろう。その他、東九州編年中には無いタイプの押型文土器⁽¹⁰⁾をとりあげておきたい。〈1・2〉は円筒形に近い器形を呈し厚手、口縁部はほぼ直立するもので、横走りの山形文が施文され内面は無文である。底部はやはり平底とみられる。〈3〉のように条痕文と組み合わせられるものもある。県北部を除いて量的なばらつきはあるものの比較的安定した分布状況をみせている。九州西南部の「円筒形押型文土器⁽¹¹⁾」や「貝殻文円筒形土器⁽¹²⁾」との関連性も考慮しなければならないが、特に鹿児島県でいうところの石坂式土器が極端に少ない⁽¹³⁾と指摘される宮崎県下においては、その編年的位置づけを今後も検証していく必要がある。〈4・5〉は口縁部が下剥峰式あるいは桑ノ丸式土器にみられる内湾器形を呈し、縦走りの山形文が施されるものである。新東晃一氏はこの内湾器形の押型文土器から移入土器と在地土器との頻繁な接触を指摘している。県内の出土例をみる限り、概ね縦走り施文に固定されているようである。下菅生B式以降の縦走り施文との関連も考えられるが、類例の増加を待ったうえで再度検討したい。

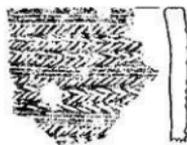


下剥式土器・桑ノ丸式土器について

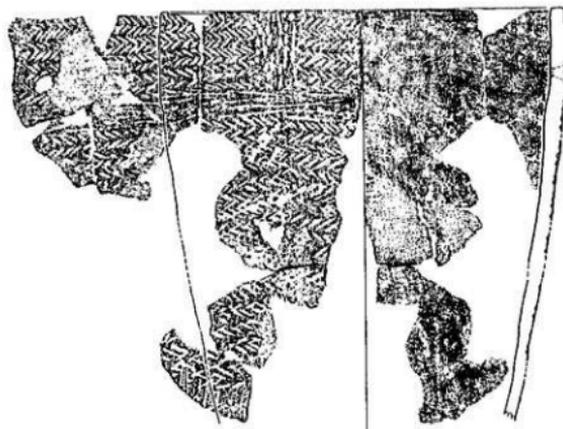
県内で出土する下剥式土器には器形や文様構成などに様々なバリエーションがみられるが、桑畑光博氏は下剥式土器と桑ノ丸式土器を細分類したうえで短沈線を有するものを「辻タイプ」とし、宮崎県から大隅半島にかけての地域に分布範囲が限定される可能性を指摘した。町内においては量的なばらつきがあるものの本遺跡をはじめ、前畑第1・第2遺跡、砂田遺跡、井手ノ尾遺跡、天神河内第1遺跡、二ツ山第1遺跡、芳ヶ迫第1遺跡、札ノ元遺跡などで出土したほか県下においても北部の北方町まで分布が確認されている。これらは口縁部の形態や施文パターンなどにより更に細分が可能と思われる。典型的な下剥式土器を含めて短沈線を伴わず貝殻押し文や刺突文または連続刺突文を施すタイプについても先後関係を詳細に検討する必要があるが、いずれにせよ「辻タイプ」は宮崎県下において下剥式土器の主要素である貝殻刺突文から様々なバリエーションをつくりながら成熟したものであり、独自の型式を設定する必要がある。その他上記には含めなかったが、芳ヶ迫第3遺跡で山形押し文に分類された土器の中に、山形押し文を斜位に施文したのち更にハの字状の短沈線を施したもの〈6〉がある。押し文土器との頻繁な接触を看取すると同時に、ハの字状の短沈線が押し文文化の影響下において派生した可能性を想起させる資料とはならないだろうか。下剥式土器に後続するとされる桑ノ丸式土器については町内では井手ノ尾遺跡と二ツ山第1遺跡、天神河内第1遺跡で比較的良好な資料がある。その他本遺跡をはじめ永迫第2遺跡、宮田遺跡、芳ヶ迫第1・第3遺跡、札ノ元遺跡でも少量出土しているが、県内においては現在のところ高鍋町以北での報告例をみてもおらず稀薄になることは否定できない。前述した「辻タイプ」の分布状況とは異なり、両者の先後関係あるいは押し文土器との接触度を含めた地域性を認識できよう。



〈芳ヶ迫第3遺跡〉



〈芳ヶ迫第1遺跡〉



〈天神河内第1遺跡〉

塞ノ神式・平椀式土器について

塞ノ神式土器の編年的位置付けについては近年、新東晃一氏の塞ノ神様式と平椀様式が時間的に並行関係にあるとする、いわゆる「二系統説」に対して否定的な見解や事例が盛んに出されているが、ここでは詳細な検討を控え事実報告にとどめる。

本遺跡では貝殻文系の三代寺式と燃糸文系の椀ノ原式にあたるものが出土している。椀ノ原式はB区で破片2点にとどまったが、三代寺式はA・B区をとおして数量ともに高い比率を占めており、前出の下割式土器と三代寺式の兩段階を主体とする遺跡であったことが伺われる。本遺跡の出土状況をみるにおいて新東氏の二系統説中で三代寺式と共伴すべき平椀式土器はない。同様の状況は井手ノ尾遺跡・天神河内第2遺跡においてもみられる。また、八重地区前畑第1遺跡のA区では木佐貫原式土器のみ、その東側にあるB区ではトレンチ内から平椀式土器が、A区から200 m南西のC区では木佐貫原式土器と椀ノ原式の両者が少量あるものの平椀式土器が大半を占めていた。以上のことから、「二系統説」を肯定する要素が現状では見出せないことを述べておきたい。

前期以降の資料について

前期以降になると、本遺跡周辺においては極端に出土資料の減少する傾向がみられる。遺物を伴った調査例としては、権現谷第1遺跡⁽⁹⁾で前期の上器を伴う竪穴住居跡が1軒、砂田遺跡⁽⁹⁾で後期の土器を伴う落し穴状遺構が、永迫第2遺跡⁽¹⁰⁾で前期～後晩期の土器が少量出土したのみにとどまり、早期に比べて数量ともに極めて薄い。開墾による赤ホヤ火山灰堆積以降の遺物包含層の破壊が起因していることも否定できないが、表採資料すら殆ど無く単なる偶然とは考え難い状況である。これに対して町内には前期の遺物が出土した長敷遺跡⁽⁹⁾と元木遺跡⁽⁹⁾、前・中期の遺物が出土した七野第4遺跡⁽⁹⁾、中期の竪穴住居跡が検出された二ツ山第3遺跡⁽⁹⁾、後期の竪穴住居跡が検出された丸野第2遺跡⁽⁹⁾と高野原遺跡⁽⁹⁾、後期の土器が出土した青木遺跡⁽⁹⁾と黒草遺跡⁽⁹⁾、前期から後晩期の上器がそれぞれ出土した本野遺跡⁽⁹⁾と天神河内第1遺跡⁽⁹⁾などがあるほか、本遺跡周辺を除く各地で表採資料がある。早期の豊富な本遺跡周辺における赤ホヤ火山灰降下以降の衰退は、集落形態の変容そのものを如実に表す事象として特筆しておきたい。

第3節 弥生時代の諸様相

本遺跡において遺物・遺構等はみられなかったが、近隣には弥生時代後期の竪穴住居が2軒検出された権現谷第1遺跡⁽⁹⁾と遺跡詳細分布調査により発見された野崎第1・第2遺跡⁽⁹⁾がある。権現谷第1遺跡の竪穴住居はプランがいずれも方形で間仕切り等を有するものはない。また、集落の規模を確認するまでには至らなかった。これらの他、町内では元木遺跡と高野原遺跡・本野遺跡⁽⁹⁾・天神河内第1遺跡⁽⁹⁾で中期末から後期の竪穴住居で構成される集落跡が確認されている。元木遺跡は大半が花弁状をはじめ間仕切りを有する住居であり、権現谷第1遺跡とは様相が大きく異なる。高野原遺跡もほぼ同様のものが検出されたが、これより数十メートル南側に位置する本野遺跡では花弁状住居は無く、方形住居の隅に1か所の突出部を有するものを2軒検出したほかは方形プランのみであった。この3遺跡からはいずれも山ノ口式の甕が出土しているが権現谷第1遺跡には無い。これらのことが時期差あるいは集落の在り方そのものの違いを示しているものなのかは高野原遺跡・本野遺跡の報告段階で検証したいが、ここでは現段階において本遺跡周辺に間仕切り住居の分布はみられないことを述べておきたい。

第4節 古代の諸様相

本遺跡において遺物・遺構等は見られなかったが、近隣には布痕土器が出土した永迫第2遺跡⁽¹²⁾や同遺物が表採された鹿毛第1遺跡・野崎第2遺跡がある。これより北側は比較的険しい地形を呈するが、すぐ西側には南北に流れる大淀川支流の境川がある。時代はかなり下るが近世の鹿児島街道の問道として「八重～山之口町飛松～麓」のルートがあったと伝えられており、上記3遺跡の立地はたいへん意味深い。また町内では、各地で同時代の遺跡が発見されている。このほか『延喜式』にみられる日向路16駅の「救式駅」が田野町七野であるとする説もあるが、現在のところ地名・遺跡ともに確認しうる資料はない。しかし、集落が存在するうえで「道」との関連がより重要な要素となる時代であったことはいまでもなく、大隅半島ならびに県南部や現在の高岡町・国富町方面に至るルートを考えて際、地理的見地から交通の要衝地となりうる条件を備えた地であったことは推察できよう。

第5節 中世の諸様相

長方形土坑について

本遺跡においては時代・用途について確証を得たものではないが、報文のとおり中世以降の土坑（SC-01）が検出された。土坑中に霧島高原スコリア⁽¹³⁾が敷き詰められていたが、当地周辺においては同スコリアが明瞭な層をなすような堆積は見られないことから、他地域から入手したものと考えられる。また、同テフラの総量は概算して約0.45m³に至る。更にこの上層から検出された桜島3テフラについても同様に明瞭な堆積層は見られない。このような状況から俗も近現代の遺構のようであるが、当地域で頻繁に見られる「イモツボ⁽¹⁴⁾」といわれるものとは埋土の状態などがまったく異なる。上記のことやその形状から推察して、土坑墓と認識するものであろう。現在のところ同テフラが敷き詰められる例は他に未発見であるが、類似する例として御池ボラ⁽¹⁵⁾を敷き詰めた土坑が八重地区の宮出遺跡をはじめ、七野地区の長藪遺跡⁽¹⁶⁾ほかで検出されている。御池ボラの良好な堆積層は町内で最も西側に位置する天神河内第1遺跡⁽¹⁷⁾で確認されているのみで、本遺跡及び周辺においては混入した層として見られるのみである。長藪遺跡のSK15については全燐酸の分析をおこなったが、土坑墓と立証しうるような良好なデータは得られていない。これらはいずれも縄文時代の遺構として報告しているが、その形状及びテフラの検出状況は本遺跡のSC-01と共通する部分が多く、再度検討すべき課題を残した。

山城・集落その他について

中世になると町内でも野田城（仮屋城⁽¹⁸⁾）・ヒダカン城・上ノ原城・梅谷城⁽¹⁹⁾などの山城が確認されている。本遺跡周辺においては明確にされていないが、近隣の八重地区前畑第2遺跡⁽²⁰⁾においては矢研掘りの溝が3本（SD29～31）検出されている。埋土中に桜島3テフラを含んでおり中世山城の堀切ではないかと考えられるが、開拓もしくは開墾がもたらした結果であろうか、発掘調査が実施された平成2年度の段階では周囲にそのような特徴を示す地形などは見られなかった。また、特徴的な地名も残存していない。町内の周知の山城周辺には関連するような地名（旧字名）が各所に残っているほか未発見地においても堀ノド（灰ケ野）・堀下（下屋敷）・陣の下（光町）・堀口（堀口⁽²¹⁾）などがある。町内全域について言えることであるが山林内は大半が未踏査であり、いずれも中世山城が新たに発見されるであろう。その他、町内では芳ヶ迫第2遺跡⁽²²⁾や元木遺跡⁽²³⁾・天神河内第1遺跡⁽²⁴⁾などで発掘調査による中近世の出土資料がある。元木遺

跡では多数の掘立柱建物と当時の遺物が出土した。遺跡所在地の集落名は「船ヶ山」であり、清武川支流岡川左岸の段丘上にあつて現在は消滅したが「勘場」という地名があつたとの伝承もある。天神河内遺跡では溝により画された掘立柱建物と丘陵を堅壘状に掘った溝が検出されたことは特筆されよう。以上の背景には青井岳を境とする（以東の）伊東氏と（以西の）島津氏の攻防があつたことはいまでもないが、これらを含めた当地周辺の歴史的環境から、前畑第2遺跡において矢矧掘りの溝が設営されたことの重要性を認識しておく必要がある。

第6節 おわりに

本遺跡の調査原因である「県営畑地帯総合整備事業七野・八重地区」をもって、野崎地区及び八重地区における面工事を伴った農地整備事業がほぼ完了となることを、平成9年度事業の事前協議において確認した。上記地区において発掘調査による記録保存のために消滅した遺跡は、既に8遺跡に至る。これを機に現在までに得られた調査結果をもとにして、本遺跡周辺の歴史的環境を僅かでも復元したいという意図から、本章においては不十分であるが幾つかの問題点あるいは特筆すべき事項を羅列しておいた。今後は機を得て各課題をより深く掘り下げていきたい。また、当地域における出土資料が各時代研究の一助となれば幸いと思う。

本遺跡の調査実施にあつては、元野地区元野河内遺跡の大規模な調査も同時に進行していたことから当町のみでの対応が困難であつたため、現地における協力を宮崎県文化課ならびに宮崎県埋蔵文化財センターにお願いした。多忙なか、この依頼を快く引き受けて下さった両機関ならびに北郷泰道氏・永友良典氏には深く感謝申し上げたい。

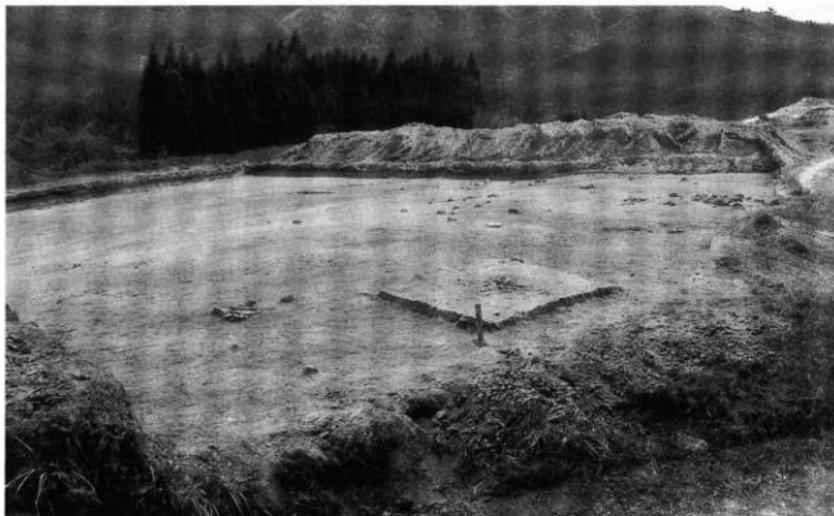
参考・引用文献及び註

- (1) 新東晃一「南九州の円筒土器と角筒土器」『鎌木義昌先生古希記念論集 考古学と関連科学』1988
- (2) 新東晃一「早期九州貝殻文土器様式」『縄文土器大観1』1989
- (3) 桑畑光博「南九州貝殻文円筒土器の終焉（予察）」『第9人類史研究会研究発表資料』1997
* 桑ノ式土器の口縁部が内湾する嚢形ではほぼ固定化されているのに対し、下野崎式土器のそれには多様なバリエーションがみられる。
- (4) 桑畑光博「南九州貝殻文円筒土器の終焉（予察）」『第9人類史研究会研究発表資料』1997
- (5) 新東晃一「早期九州貝殻文土器様式」『縄文土器大観1』1989
- (6) 桑畑光博「西日本の押型土器の展開」『古文化談叢』第35集 1995
* 報文中のVc類・Vh類・Vm類はいずれも横走り施文ののちナデ消しにより加文帯をつくるもので、原体条痕が見られないことから押型土器の幅年上では古段階と考え、帯状施文を施す川原田式土器と共通のものとして認識した。これらが移入品であるかどうかは現在のところ判断しかねるが、機を得て他地域傾向との比較検討をおこなってきたい。
- (7) 河口貞徳「塞ノ式土器」『鹿兒島考古』第6号 1972
- (8) 新東晃一「塞ノ式土器」『縄文文化の研究6』縄文土器1 1982
- (9) 「芳ヶ追第1第2第3遺跡・札ノ元遺跡」『田野町文化財調査報告書』第3集 田野町教育委員会 1986
- (10) 「八重地区遺跡」『田野町文化財調査報告書』第19集 田野町教育委員会 1994
- (11) 「水追第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第21集 田野町教育委員会 1996
- (12) 「井ノ尾遺跡」『田野町文化財調査報告書』第14集 田野町教育委員会 1992
- (13) 「七野第4遺跡」『田野町文化財調査報告書』第25集 田野町教育委員会 1997
- (14) 「宮崎県内における縄文時代草創期の遺物集成」宮崎縄文研究会 1997
「元野河内遺跡概況」『田野町文化財調査報告書』第27集 田野町教育委員会 1997
* 「上」記概要報告書には未掲載。
- (15) 「宮崎県内における縄文時代草創期の遺物集成」宮崎縄文研究会 1997
* 平成元年度に実施した「町内遺跡詳細分布調査」1990において表採されたもので、同報告書には未掲載。
- (16) 「奥ノ仁田遺跡・奥島遺跡」『西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）』西之表市教育委員会 1995
- (17) 「霧島遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第4集 宮崎県埋蔵文化財センター 1997
- (18) 「宮崎県埋蔵文化財センターにおいて発見した際の感覚的な所見である。
- (19) 新東晃一「早期九州貝殻文土器様式」『縄文土器大観1』草創期・早期・前期 1989

- (19) 雨宮瑞生「南九州縄文時代早期土器編年」『南九州縄文通信』No. 11 南九州縄文研究会 1997
- (20) 「草壁・山下遺跡群」『宮崎市文化財調査報告書』宮崎市教育委員会 1997
- (21) 「二ツ山第1遺跡」『田野町文化財調査報告書』第13集 田野町教育委員会 1992
- (22) 「元野地区遺跡(高野原遺跡)概要」『田野町文化財調査報告書』第24集 田野町教育委員会 1996
- *上記概要報告書には未掲載。
- (23) 若永哲夫「九州東南部における縄文時代早期遺跡の概観」『宮崎総合博物館研究紀要』No. 13 1988
- (24) 白岩修「宮崎県内における押型土器について」『宮崎考古』第15号 1997
- (25) 若永氏が上記文庫において「南半部に特徴的なもの」としてとりあげたものを含む。また、この中で同氏が「外反する器形の外面に大きく冠歯状に施文するもの」について「器形的にはヤトロコ式に近く地域的土器として 新形式の可能性があると指摘しているが、現在に至って町内及び周辺における同類例の出土は無いため、ここには含めなかった。
- (26) 山崎純男・平川祐介「九州の押型土器」『考古学ジャーナル』No. 267 1986
- (27) 木崎康弘「縄文早期土器群の編年学的研究」『高野・上の原遺跡』熊本県教育委員会 1996
- *鹿毛第3遺跡のJc-d・g類は木崎編年の中原Ⅲ～V式に相当するものである。
- (28) 前迫亮一「倉園B遺跡の再検討 1」『南九州縄文通信』No. 7 南九州縄文研究会 1993
- *近年は石坂式土器の出土例も徐々に増加しているが、当町周辺以南及び以西にはほぼ限定されそうな傾向がみられる。
- (29) 新東晃一「縄文早期土器の補綴孔」『南九州縄文通信』No. 3 南九州縄文研究会 1990
- (30) 桑畑氏は(3)の資料中で「石坂式土器と下刺峰式土器には福岡山式土器と早水台式土器」『桑ノ丸式土器には横方向施文だけでなく、縦方向施文・不規則走行施文による新しい段階の押型土器との共同体傾向あり(具体的には下書生B式土器前後)とし、これらの「共出」事例から下刺峰式と早水台式、辻タイプと下書生B式、桑ノ丸式と下書生B式～辻式(田村式併行)の並行関係を探べ、加えて「県中央部においては下刺峰式土器から桑ノ丸式土器にかけて、共存する押型土器(早水台式～田村式併行期)の出土比率が急激に高くなる」と指摘している。確かにこのような傾向は、当町においても顕著にみられる。また当地域においては早水台式の段階で平底化しており、在地土器文化との密接な交流の証しとも理解しうるが、早水台式土器の本来の姿である尖底の出土例が殆どみられないという現状もあり、これを早水台式に併行するものとして(下書生B式も同様に)地域的な独自の形式を設定しておく必要があろう。
- (31) 「天神河内第1遺跡」宮崎県教育委員会 1991
- (32) 「笠下遺跡」『北方町文化財報告書』第1集 北方町教育委員会 1990
- (33) 桑畑氏は(3)の資料中で下刺峰式土器と桑ノ丸式土器を再分類したうえで、それぞれの先後関係について検討作業をおこなっている。
- *特に(広義の)下刺峰式土器においては、その器形にいくつかのバリエーションがみられる。具体的には口縁部の形状であり、その度合い差はあるものの直口するタイプと内湾するタイプに大別され、いずれも口唇部は平坦につくられる。後者はほぼ両厚で内湾するものと端部にかけて肥厚しながら内湾するものがある。これらが必ずしも先後関係を示す要素とはし難いが、安易な所見として直口タイプには石坂式系的、内湾タイプには桑ノ丸式的要素が看取される。異なる試みとして、いずれはこれらを再相関する作業が必要とならう。
- (34) 「大戸ノ内第2遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』第5集 高鍋町教育委員会 1991
- (35) 新東晃一「塞ノ神式土器」『縄文文化の研究6』縄文土器Ⅰ 1982
- 新東晃一「塞ノ神・平槽式土器様式」『縄文土器大観』草創期・早期・前期 1989
- (36) 松永幸男「塞ノ神式土器小考」『古文化談義』第18集 1987
- 桑畑純博「南九州縄文早期土器様式の変化について」『南九州縄文通信』No. 9 南九州縄文研究会 1995
- (37) 「長靴道跡」『田野町文化財調査報告書』第17集 田野町教育委員会 1994
- (38) 「元本道跡」『田野町文化財調査報告書』第23集 田野町教育委員会 1996
- (39) 「七野第4遺跡」『田野町文化財調査報告書』第25集 田野町教育委員会 1997
- (40) 「二ツ山第3遺跡」『田野町文化財調査報告書』第15集 田野町教育委員会 1992
- (41) 「九野第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第11集 田野町教育委員会 1990
- (42) 平成6年度宮崎県農地保全整備事業元野地区に伴う発掘調査の出土資料。未報告で現在整理中。
- (43) 鈴木重治「宮崎県田野町青木遺跡の調査」『日本考古学協会第28回大会研究発表要旨』1993
- *調査の記録資料等は不明であるが、出土物のみ南九州短期大学より譲り受け当町で保管している。
- (44) 「黒草遺跡」『九州縦貫遺産文化財調査報告書(3)』宮崎県教育委員会 1979
- 「黒草遺跡」『発掘調査報告書』宮崎大学史学研究所考古学班 1971
- (45) 「元野地区遺跡(本野道跡・高野原遺跡)概要」『田野町文化財調査報告書』第16集 田野町教育委員会 1993
- (46) 平成元年年度に実施した「町内遺跡詳細分布調査」1990において採録されたもので、同報告書には未掲載。
- (47) 「郷土の歴史(近世)」『田野町史』下巻 田野町 1983
- (48) 真田貞吉『日向国史』1973
- (49) 藤岡謙二郎『日向国』『古代日本の交通路Ⅳ』1979
- (50) 「鹿毛第3遺跡の火山灰分析」『自然科学分析調査の結果』(株)古蹟研究所 1997
- *本報告書第9章に転載。
- (51) 主に円形の穴を掘り、中に藁を敷きつめて椀子を入れた上に藁を被せ、さらに穴の上から円錐形の笠状の屋根を覆って周囲の隙間を土で塞いだ「サツマ子の椀子」を保存する穴。
- (52) 有村友洋「SK15中の全糖質含量」『田野町長靴道跡土壌調査』宮崎県総合農業試験場 1989
- * (37) 第9章、第5節に転載。
- (53) 「町内遺跡発掘調査」『田野町文化財調査報告書』第20集 田野町教育委員会 1994
- 「郷土の歴史(中世)」『田野町史』下巻 田野町 1983
- (54) 「郷土の歴史(中世)」『田野町史』下巻 田野町 1983
- (55) 「田野町旧字図」田野町役場税務課にて保管されているもの



鹿毛第3遺跡全景（北から）



A区調査状況（西から）



A区調査状況（南東から）

A区調査状況（東から）



SC-01・02検出状況（北西から）

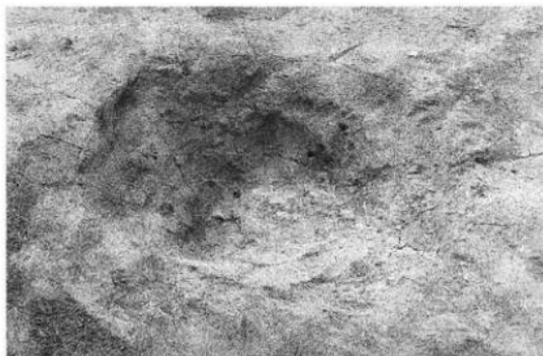


SC-01火山灰検出状況





SI-03検出状況（北東から）



SI-03土坑検出状況（同上）



SI-04検出状況（北東から）

SI-05検出状況（北東から）



SI-06検出状況（南から）



SI-07検出状況（南から）





B区調査状況（南西から）

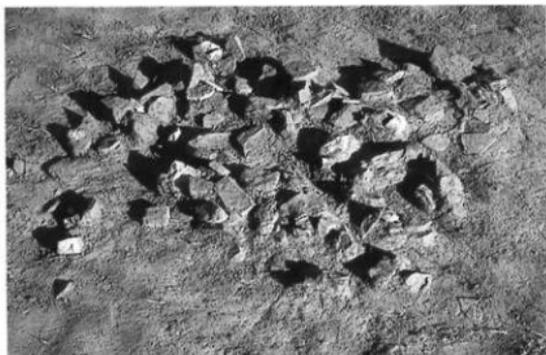


B区調査状況（東から）

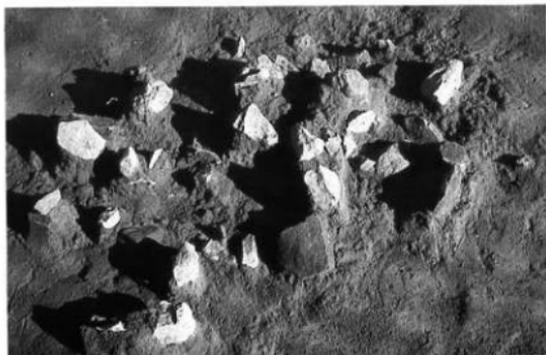
B区調査状況（南から）



SI-08検出状況（南から）



SI-09検出状況（西から）



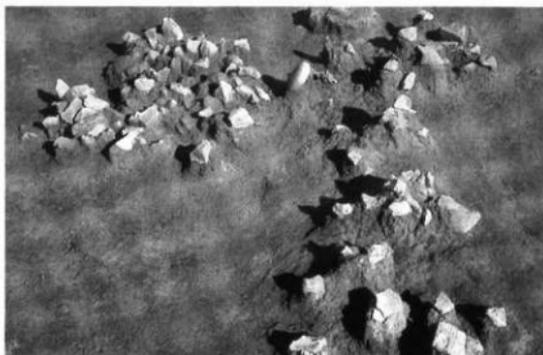
SI-10検出状況（東から）

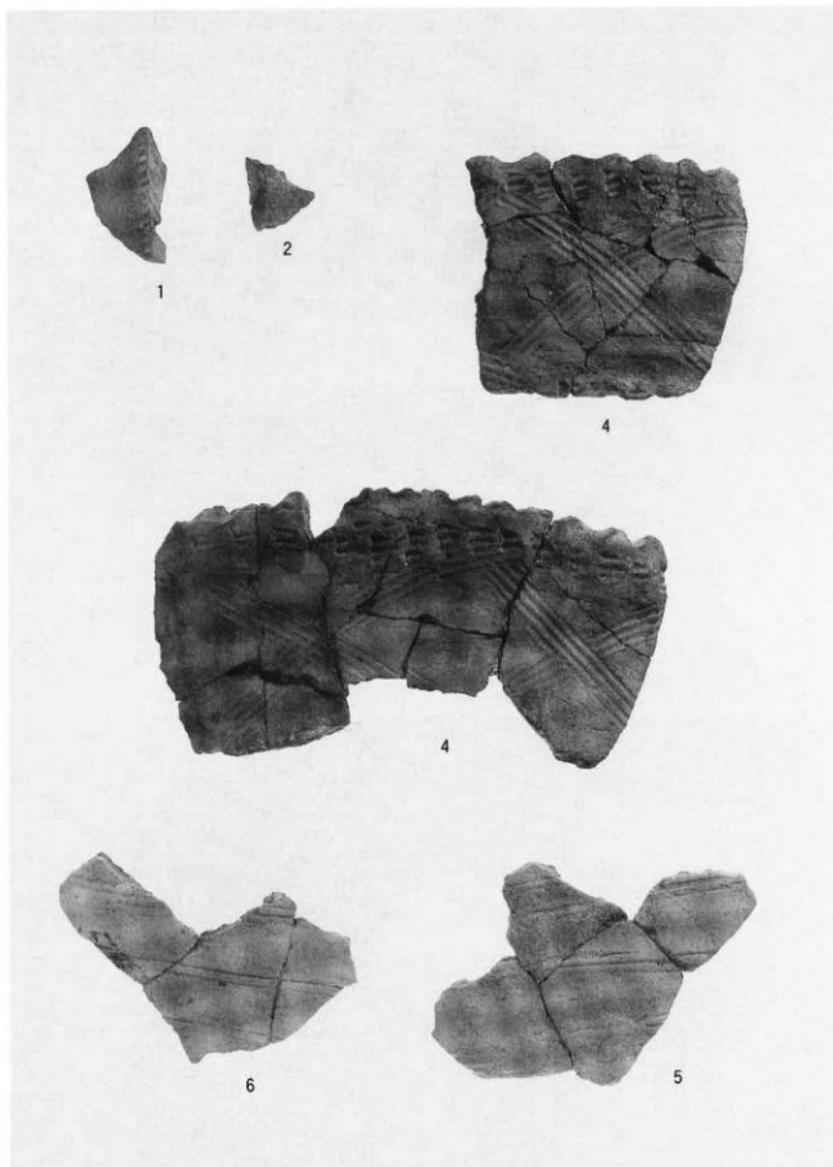


SI-11検出状況（西から）

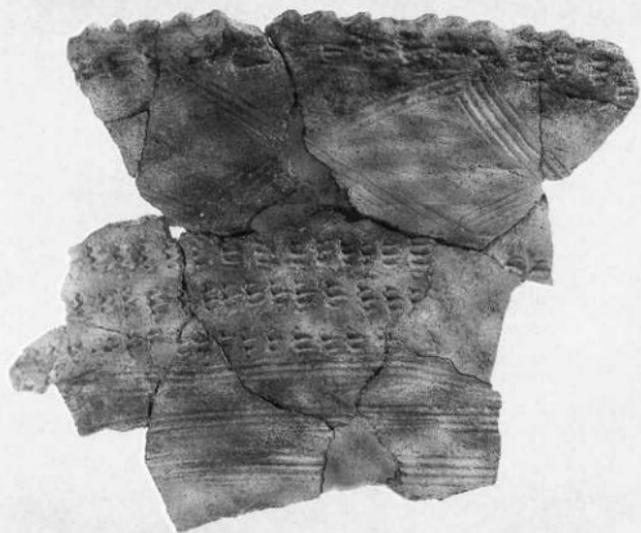


SI-14検出状況（北東から）



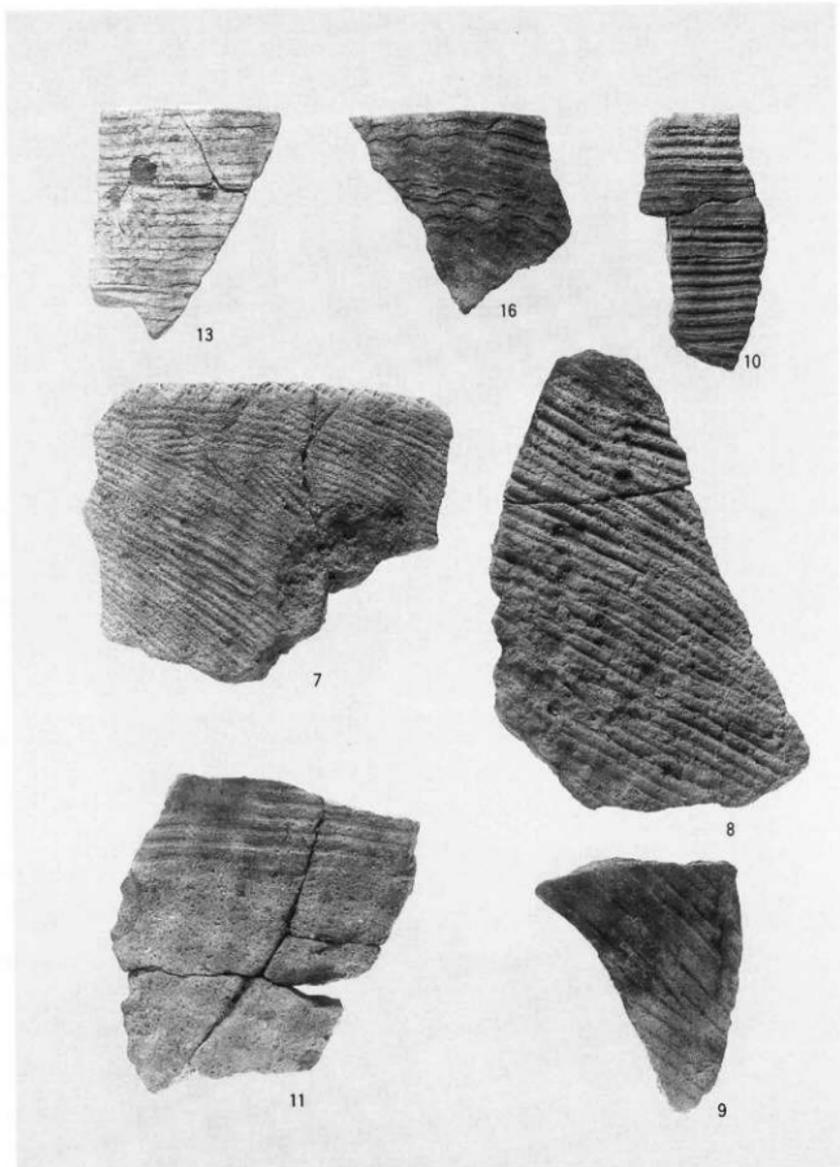


A区の出土遺物1 (角筒土器・塞ノ神式土器)

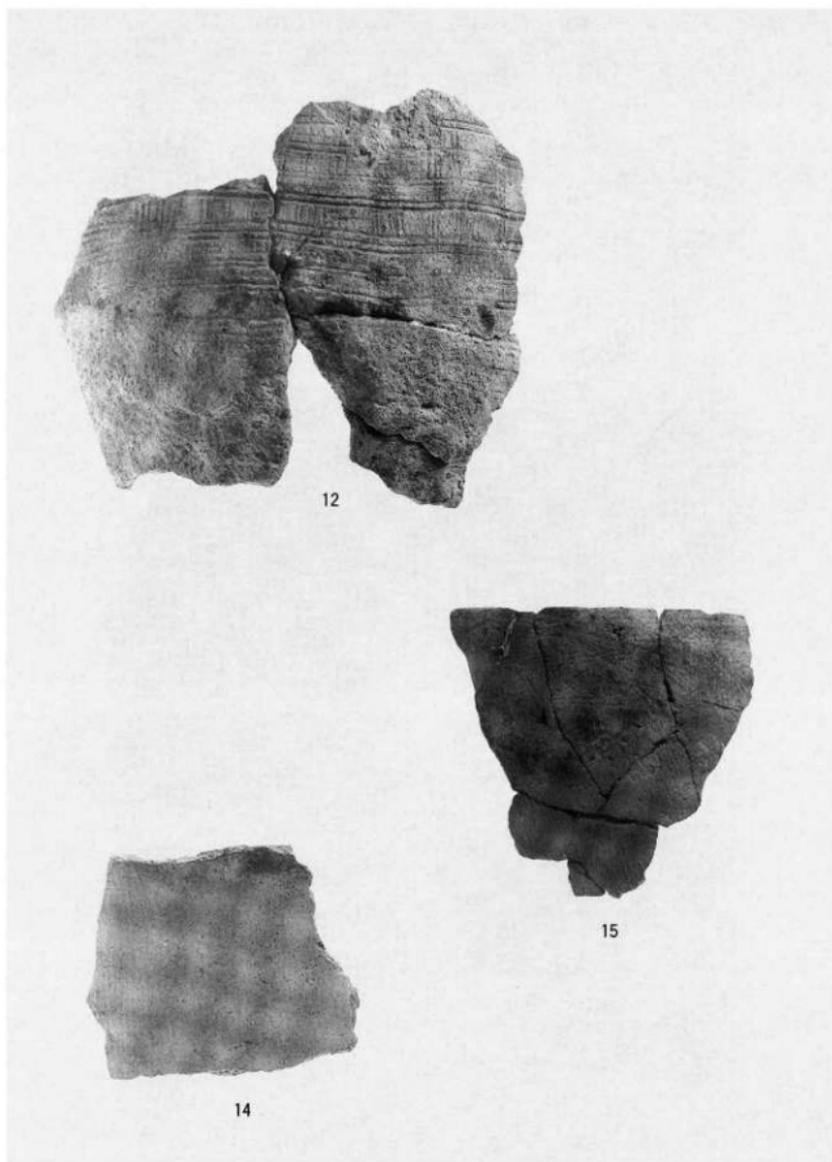


3

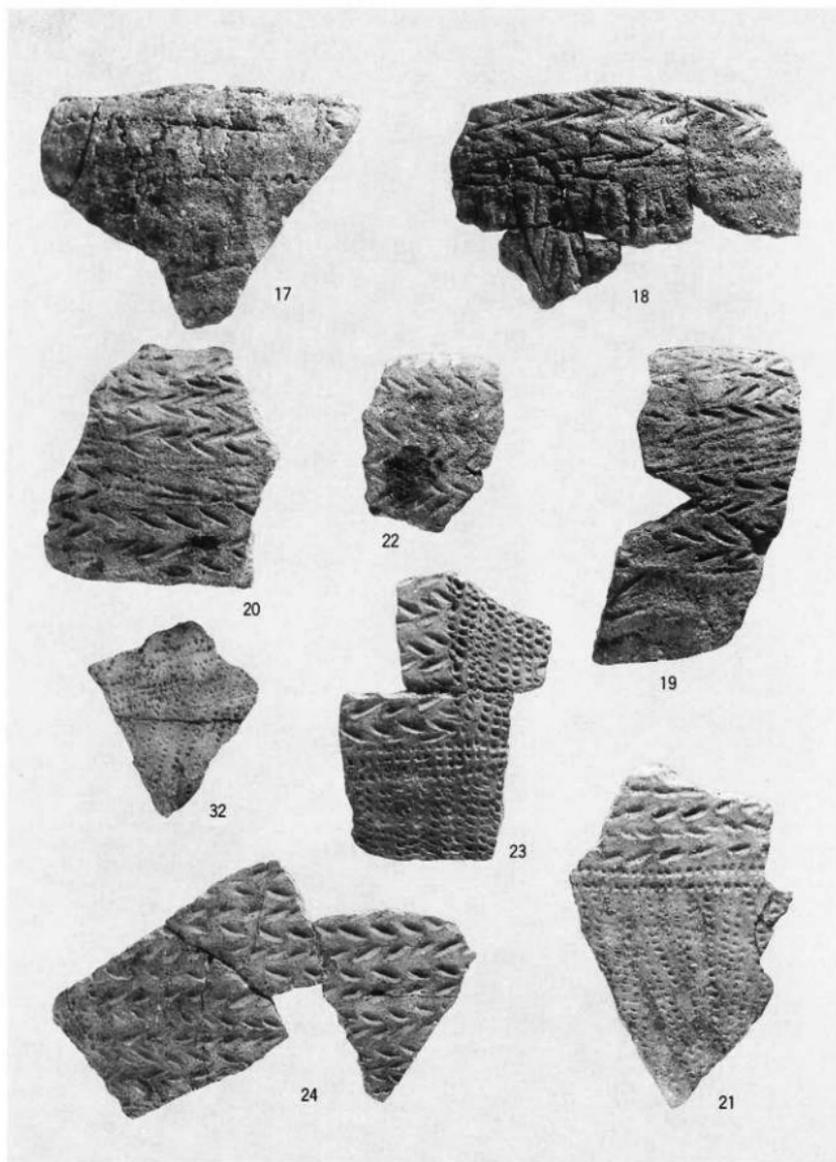
A区の出土遺物 2 (塞ノ神式土器)



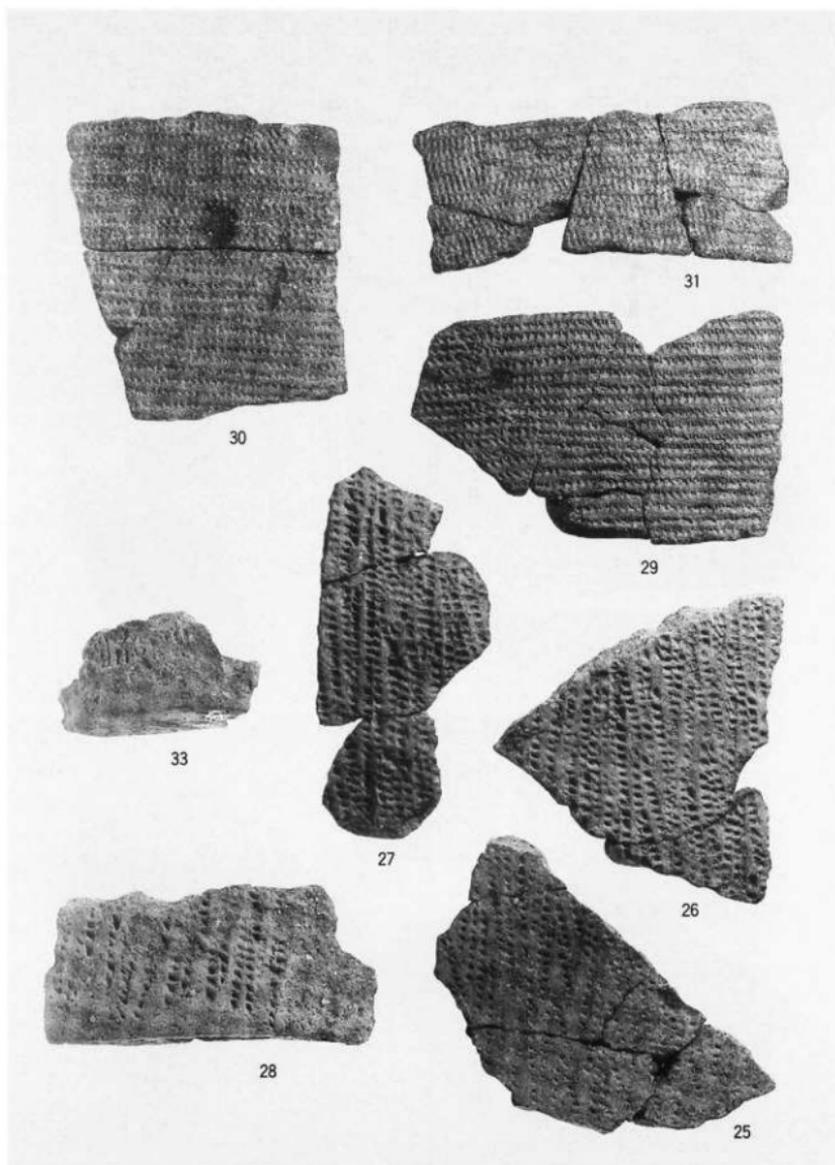
B区の出土遺物1 (条痕文土器)



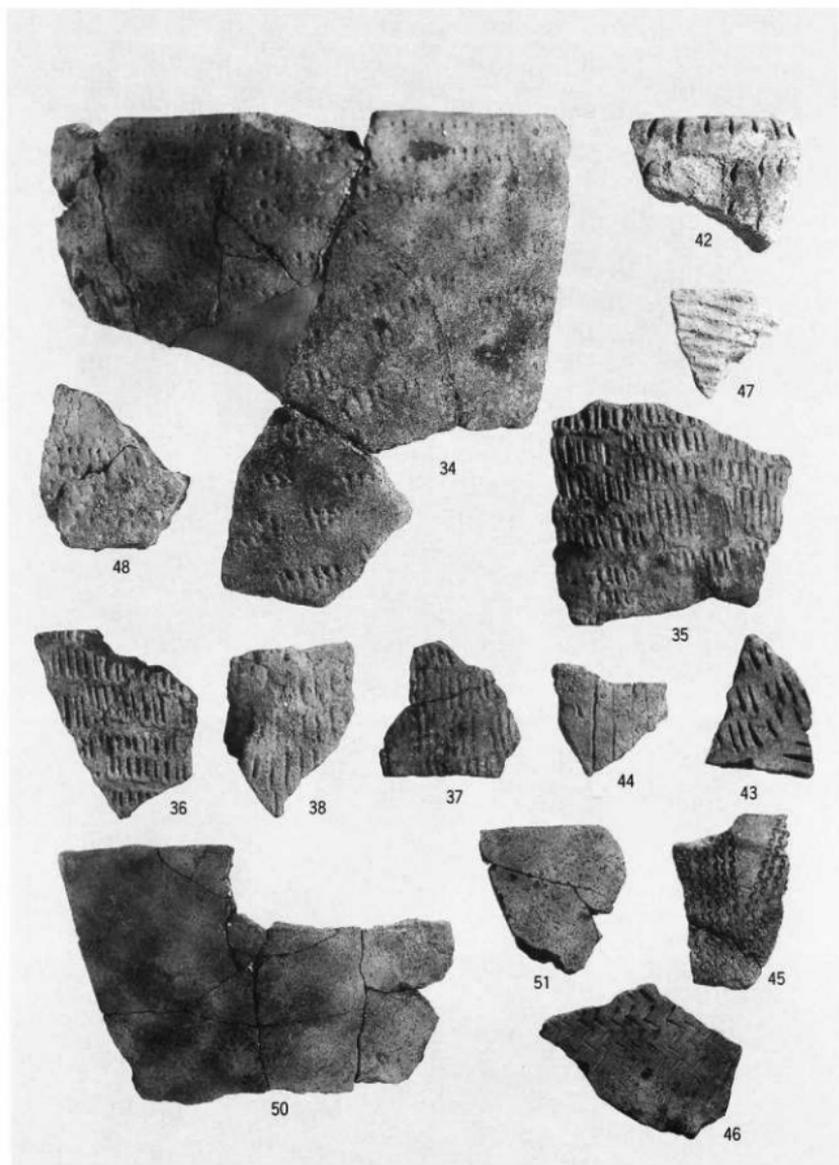
B区の出土遺物 2 (条痕文土器・無文土器)



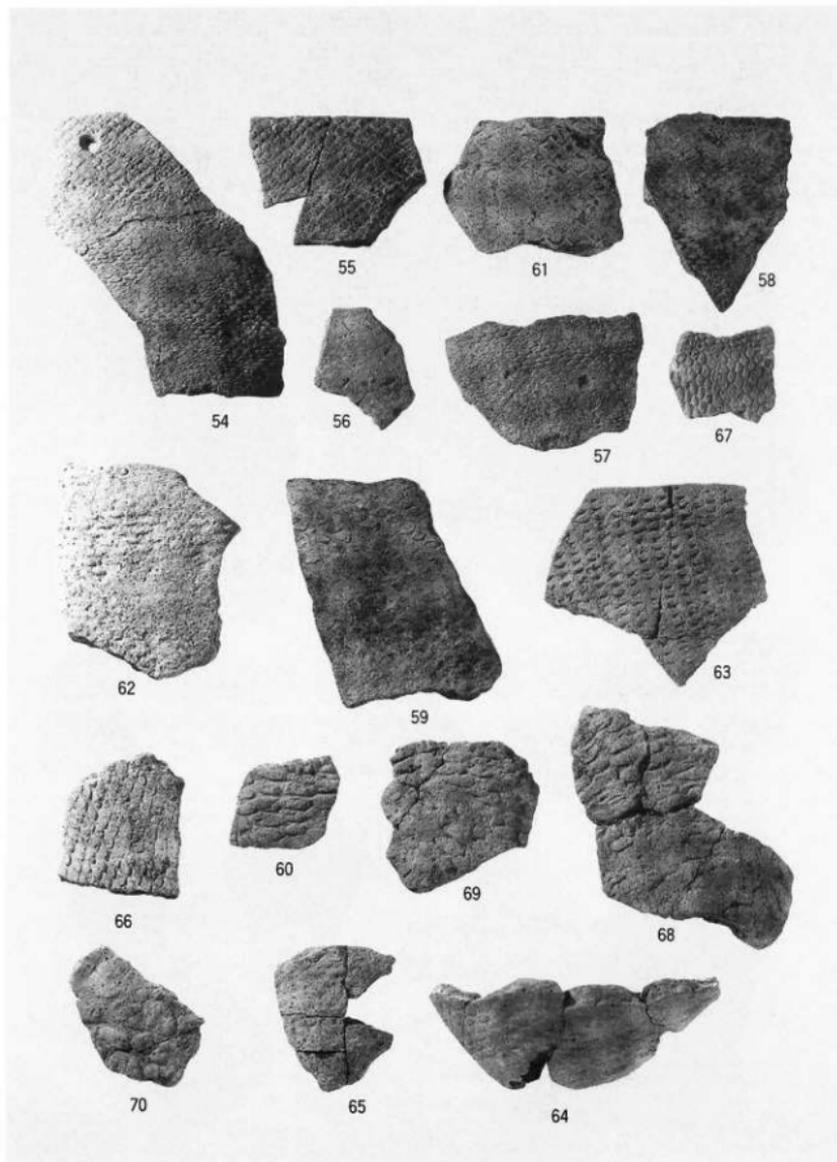
B区の出土遺物3（下剝峰式土器）



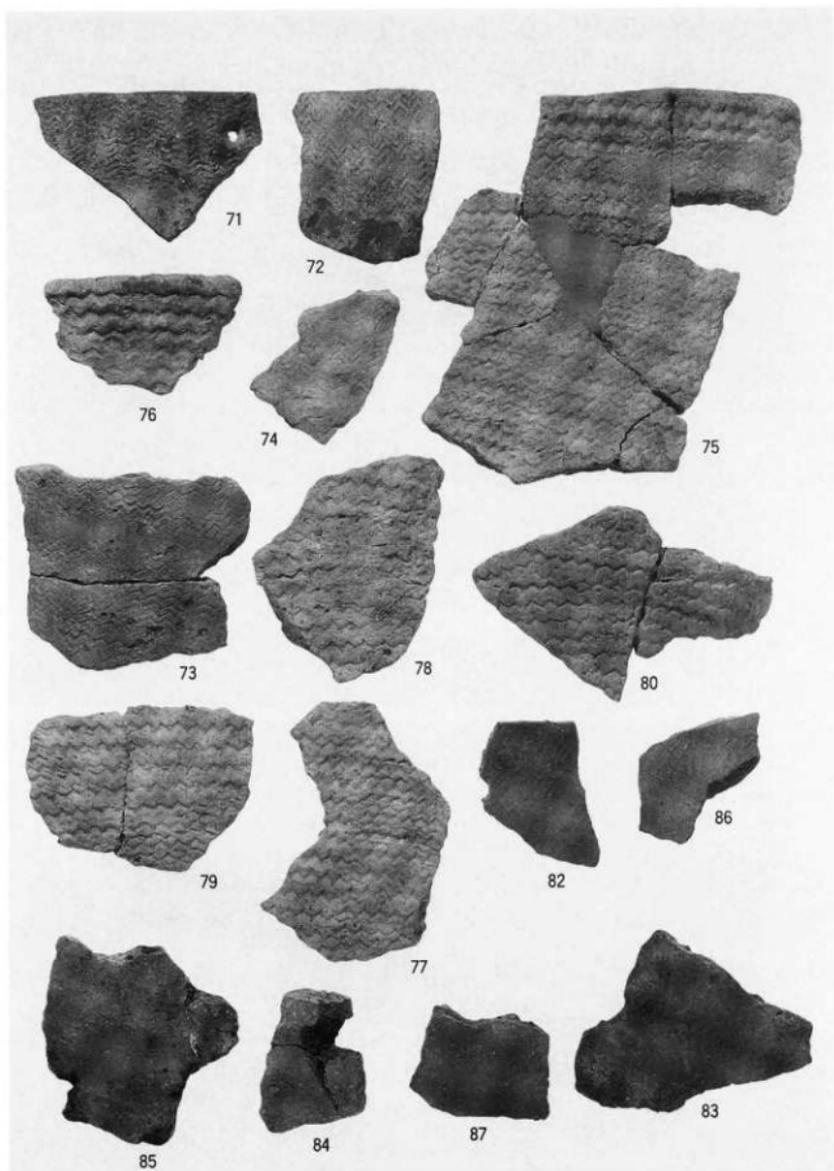
B区の出土遺物 4 (下剝峰式土器)



B区の出土遺物 5 (桑ノ丸式土器ほか)



B区の出土遺物 6 (押型文土器)

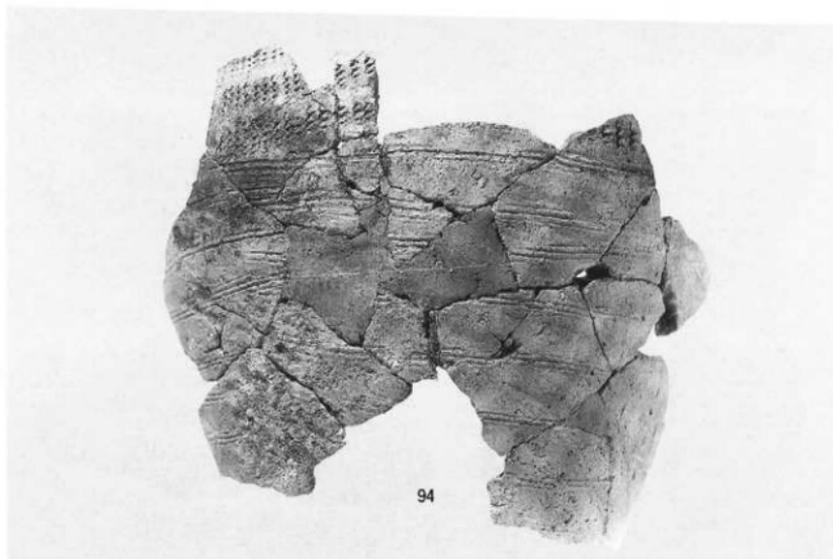


B区の出土遺物7（押型文土器）



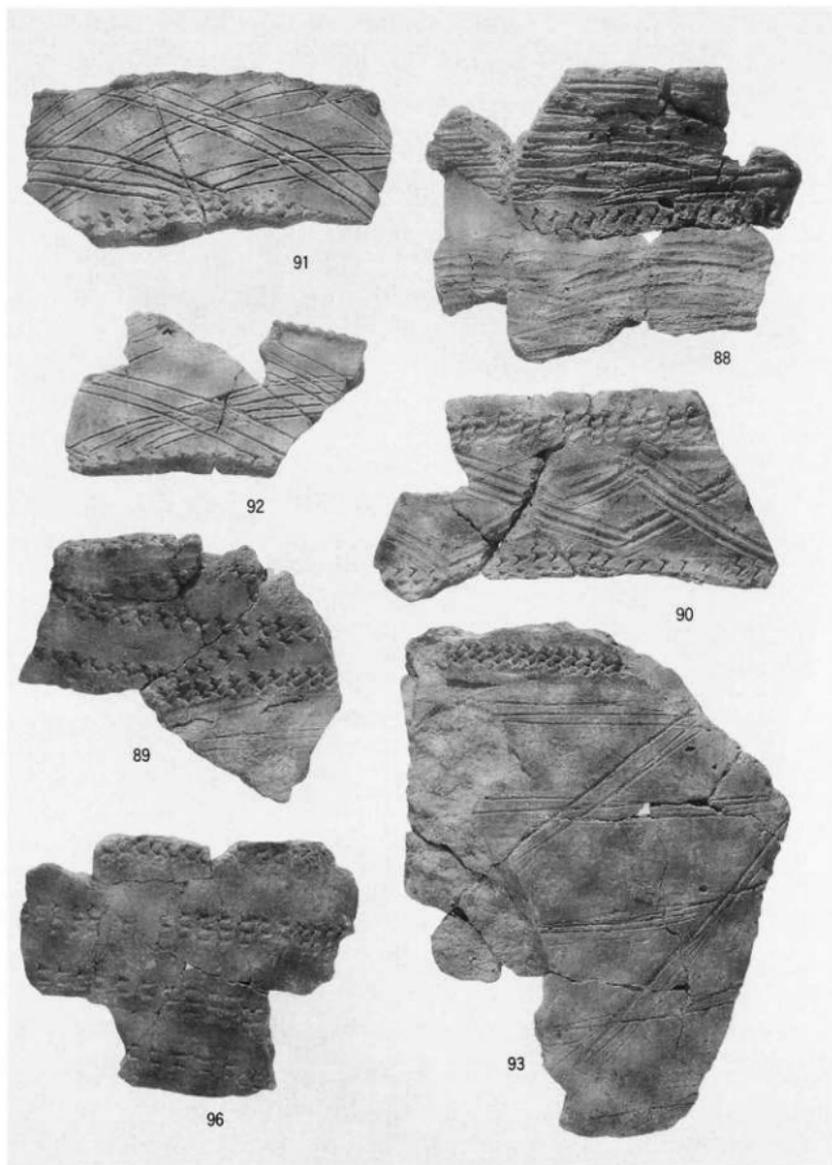
81

B区の出土遺物 8 (押型文土器)

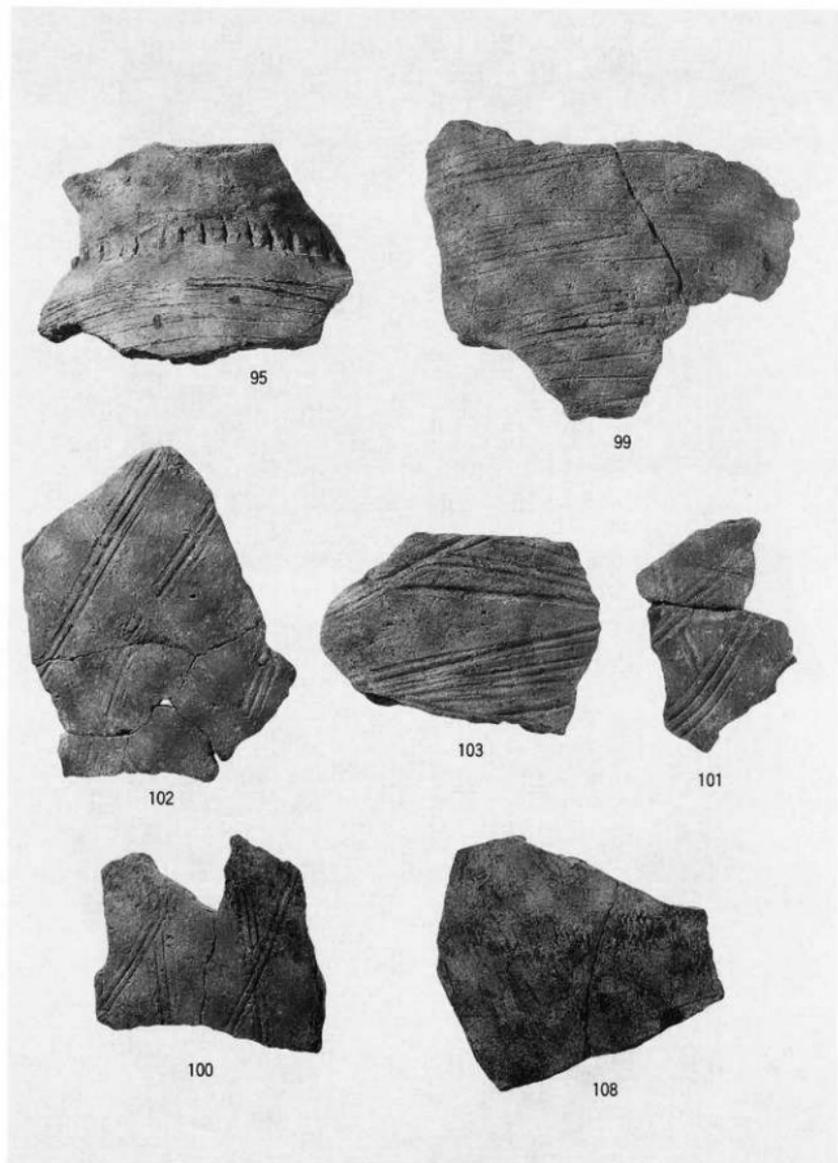


94

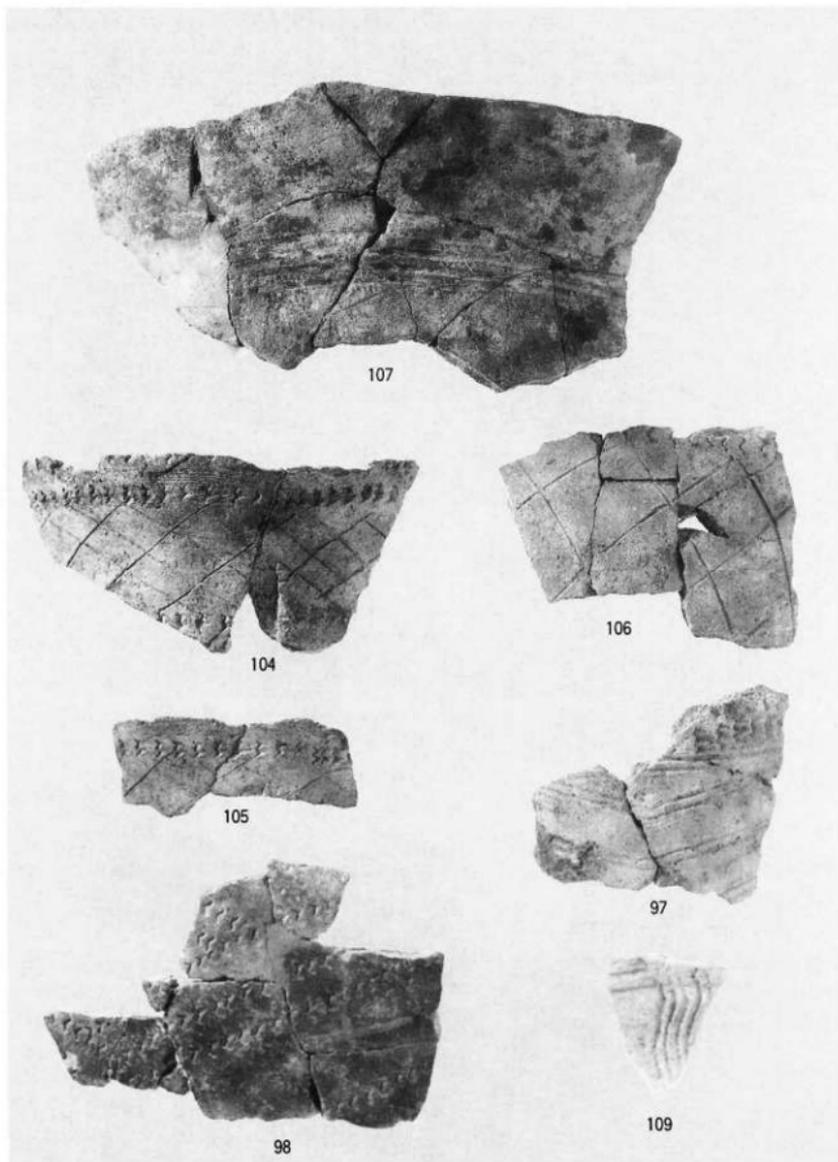
B区の出土遺物 9 (塞ノ神式土器)



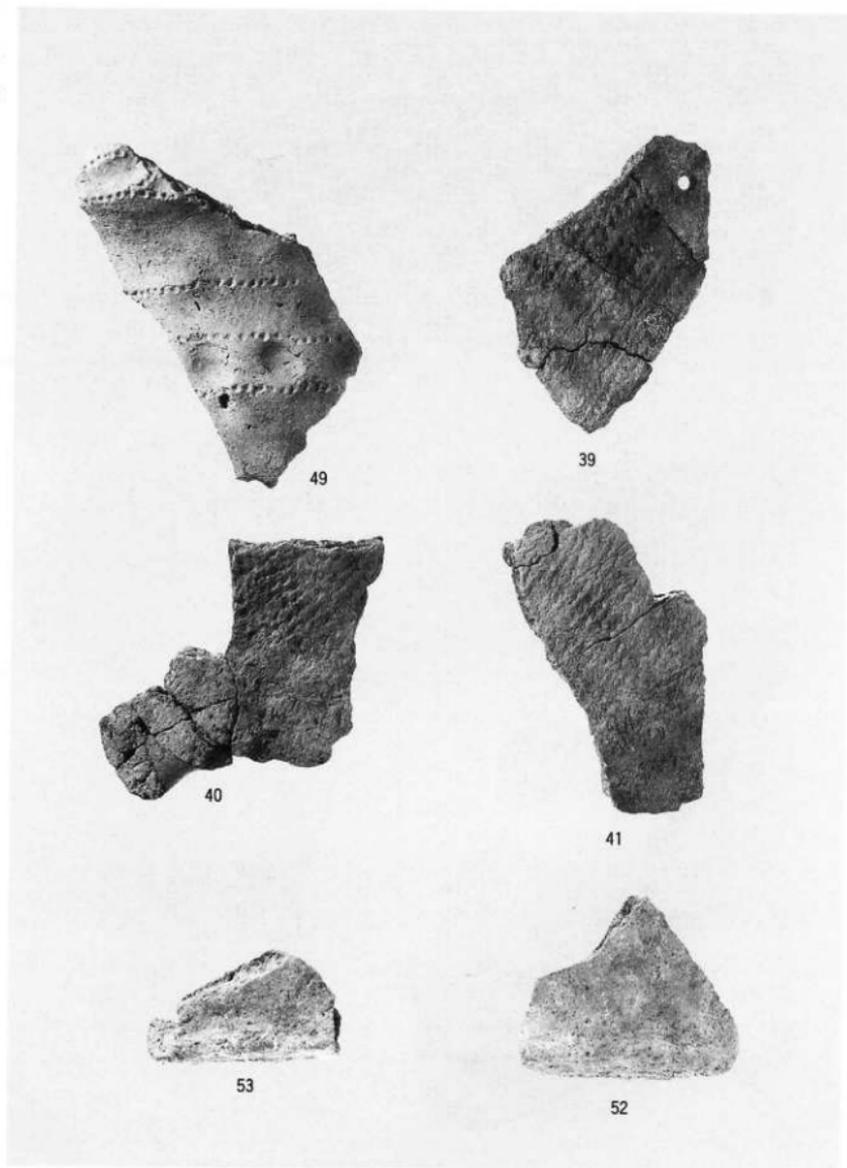
B区の出土遺物10 (塞ノ神式土器)



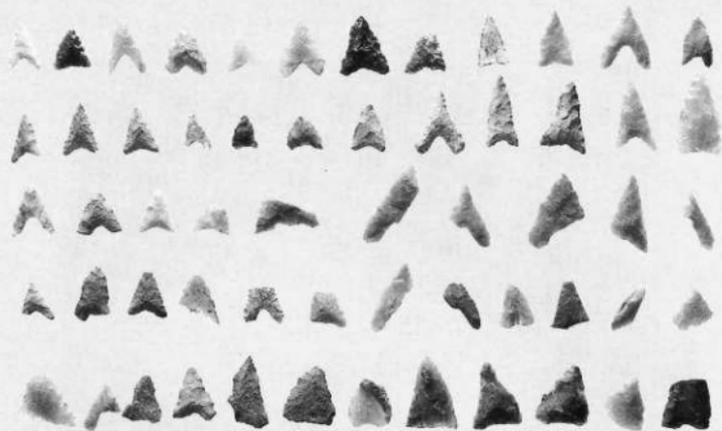
B区の出土遺物11 (塞ノ神式土器)



B区の出土遺物12 (塞ノ神式土器)



B区の出土遺物13 (縄文土器・型式不明土器)



111~169



170



171



172



173



174



176



177

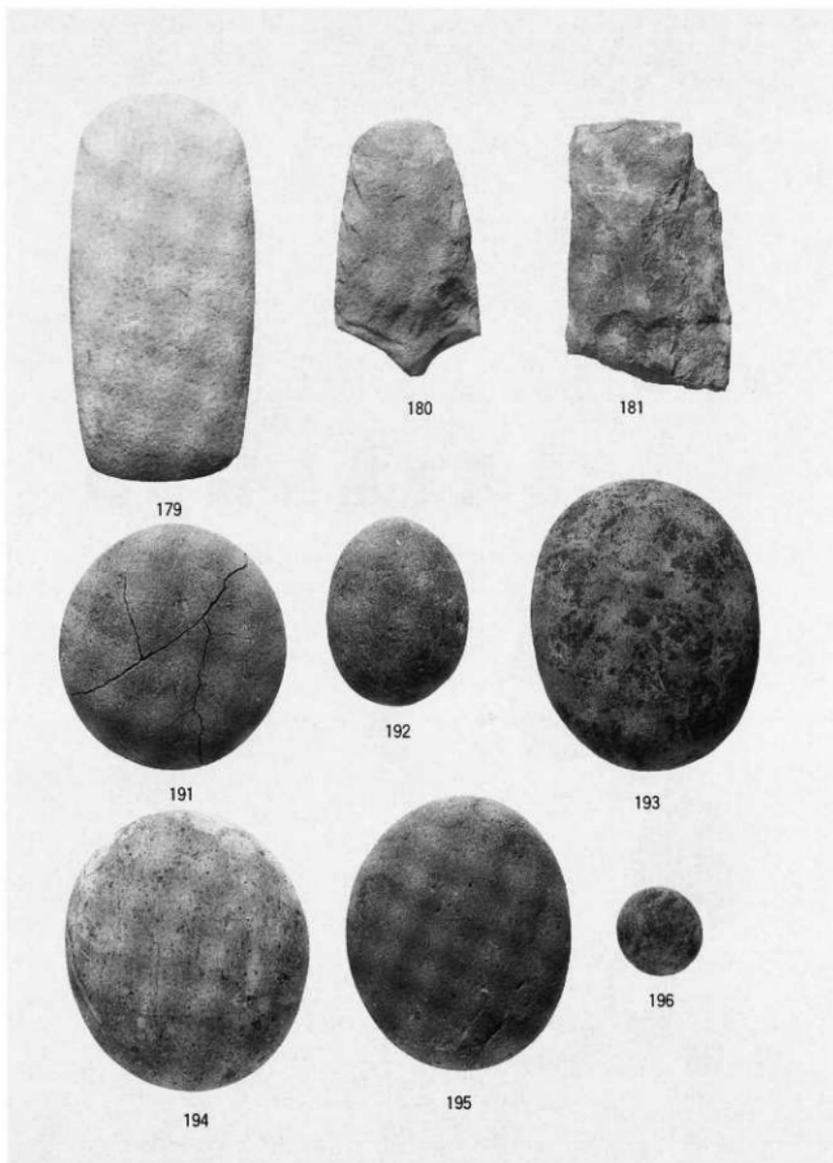


178

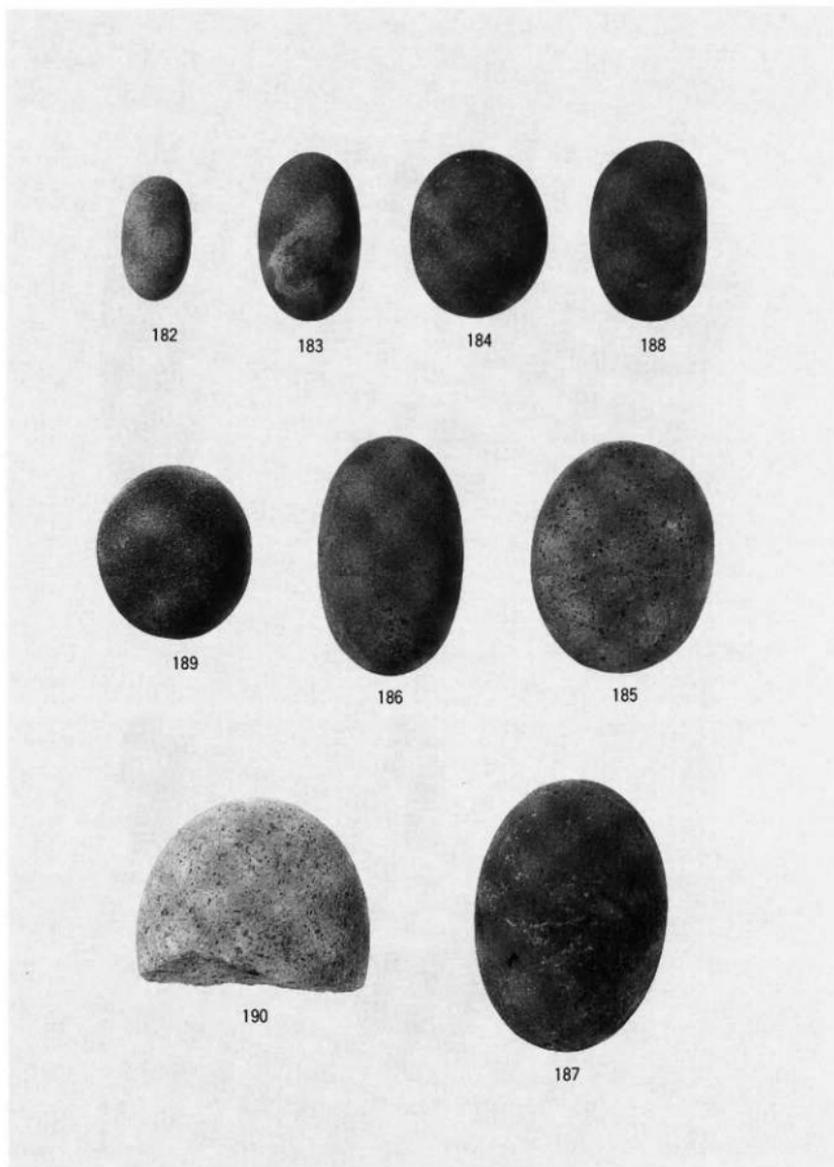


175

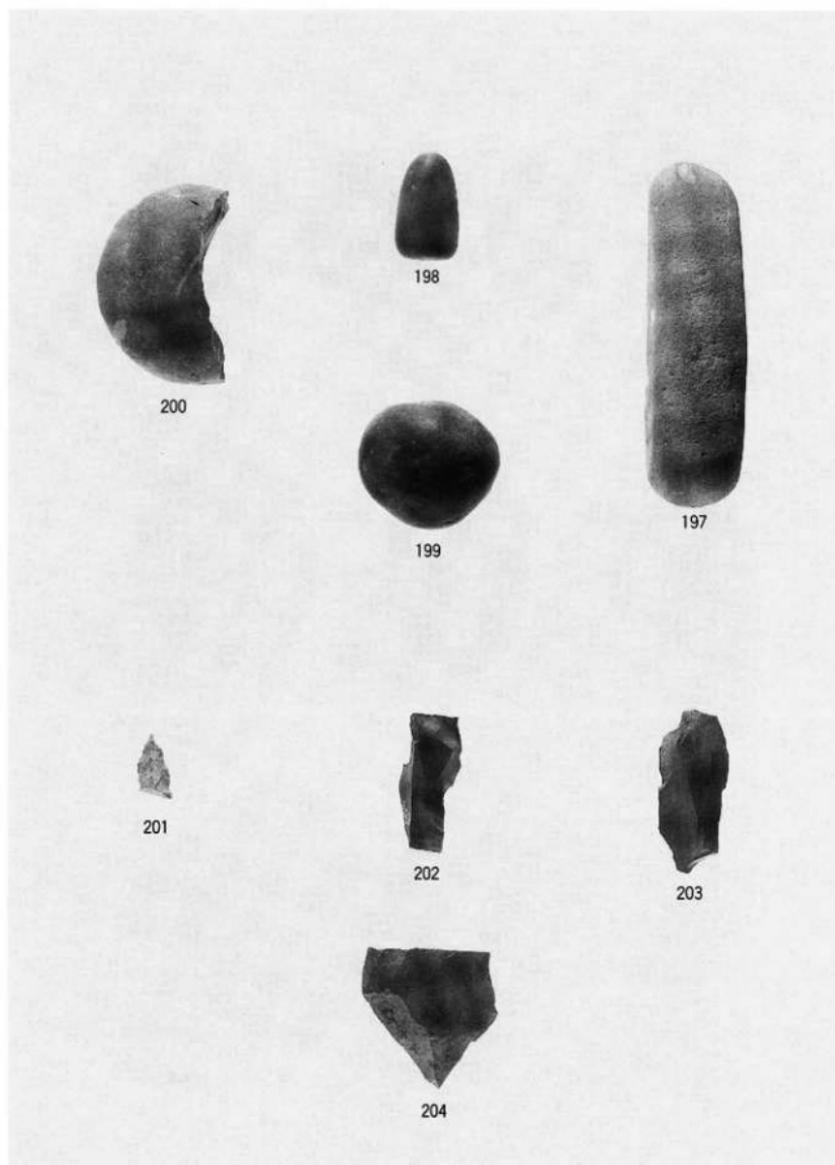
B区の出土遺物14 (石鏃・スクレイパーほか)



B区の出土遺物15 (石斧・磨石)



B区の出土遺物16 (磨石)



B区の出土遺物17（用途不明石器、旧石器）